

日本ジオパーク認定申請書



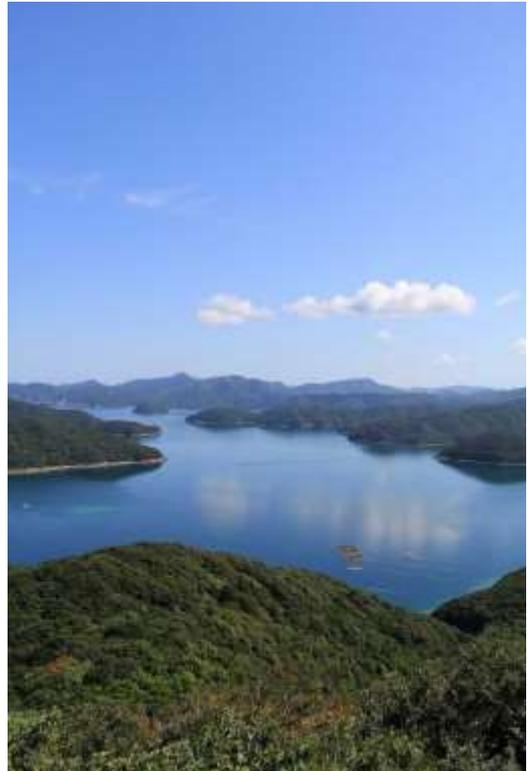
五島列島ジオパーク構想
GOTO Islands GEOPARK Plan

「五島列島 大陸との懸け橋」

～大陸とのつながりを、大地・生態系・歴史文化から感じよう～



2021年4月
五島列島ジオパーク推進協議会



はじめに

五島列島は、東京や京都から見ると西の果てに位置しています。しかし、同時に、五島列島は東シナ海の一角を占め、韓国・済州島や中国沿岸部との交流をもって発展してきた歴史をもっています。

五島列島では、古くは遣唐使を通じて大陸の文化を吸収した時代、東シナ海を舞台にした海洋貿易で発展した時代、潜伏キリシタンの移住者を受け入れた時代、近代でも日本列島各地から漁業に関わる移住者を受け入れた時代があるなど、多様な出身の人々・多様な文化と共存してきた背景があります。

戦後、我が国が高度経済成長を遂げる中で、五島列島にも変化が訪れ、将来を担う若者が流出するなど人口減少に苦しみ、大地の上に刻まれた記憶が徐々に失われようとしています。大地に刻まれた記憶は、五島列島「だからこそ」の魅力です。五島列島に住む私たちは、五島列島と強く関わる人々とともに郷土の将来を考え続けて、未来にわたり魅力ある社会の実現を目指していかねばなりません。

前回の申請から2年。この五島列島をどうしたいか、申請地域における課題は何か、魅力は何か、一から見直してきました。課題は、人々が暮らす魅力ある五島列島が未来につながらないかもしれないこと。魅力は、大地も生態系も歴史文化も「日本であって日本でない」多様性があること。この魅力を最大限に活かし、申請地域が生き残るために行きついた先は、大地を見つめ地域を語る「ジオパーク」でした。

民間団体の活動開始から8年以上、協議会発足から約4年が経ち、着実に進むジオパーク活動によって、地域の子供から大人までが自分たちの住む地域のこと、そして日本や地球全体を知り、守り、語る機会が確実に増えています。地域の魅力を楽しく知るための新たな観光も広まっており、島外の方々からも五島列島の良さを再認識したとの声も聞こえています。

地域のみんなが「五島列島、そして地球を語れる」ような日本社会実現への「懸け橋」となる取り組みを通じて、持続可能な地域社会を実現し、地域の美しい自然や独自の文化、そしてそれらを生み出す大地を作った地球活動の痕跡を守り、そのまま次の世代に伝えたい。

日本社会の先をゆく五島列島。多様性の島々の次の時代をご期待ください。

五島列島ジオパーク推進協議会 会長 野口 市太郎

目次

はじめに

A 基本情報	1
A-1 申請地域の名称	1
A-2 位置	2
A-3 面積 (km ²)	2
A-4 自然地理・人文地理学的特徴の概要	3
A-5 運営組織	7
A-6 連絡先	7
A-7 ウェブサイト	7
A-8 SNS	8
B 提出書類一覧	9
C 地域の位置	10
D 主要な地質地形学的特徴（見どころ）と他の要素	11
E ユネスコ世界ジオパーク基準の検証	13
E-1 領域	13
E-2 その他の遺産	28
E-3 管理運営	32
E-4 重複（オーバーラッピング）	39
E-5 教育活動	40
E-6 ジオツーリズム	42
E-7 持続可能な開発とパートナーシップ	44
E-8 ネットワーク活動	47
E-9 地質鉱物資源の販売	48
E-10 防災・安全対策、防災教育、災害対応	48
F 日本ジオパーク認定を希望する背景と理由	49

各章節項の主な執筆者は本文タイトルの右端に記載している



A 基本情報

A-1 申請地域の名称

五島列島 大陸との懸け橋

～大陸とのつながりを、大地・生態系・歴史文化から感じよう～

五島列島は、五島層群と呼ばれる約 2200～1700 万年前に堆積した大陸由来の砂と泥が基となり、日本列島が大陸から分かれて形成される際に、最後まで大陸とつながっていた特徴をもつ。その後のマグマの貫入や火山の噴火によって、火山台地と多くの火山島が形成されている。

これらの島々は、ハチクマという鳥にとって、日本列島から大陸へと渡る際の経由地となっている。また、温帯の植物だけでなく、対馬暖流により運ばれた熱帯・亜熱帯の植物や、大陸と近かった時代の名残である植物も分布している。

日本の西の果てであり、東シナ海交易の拠点の一つであった五島列島では、遣唐使の経由地、倭寇などの拠点、潜伏キリシタンの移住などの大陸との関わりや離島であることを背景とした歴史があり、現在までつながる文化にも強い影響を与えている。

このように、大地も、生態系も、歴史文化も、大陸とのつながりをもつことこそ、申請地域の魅力である。

五島列島は、5つの大きな島とその周辺の島々からなり、北部の中通島・若松島とその周辺の島々を上五島地域（新上五島町）、南部の奈留島・久賀島・福江島とその周辺の島々を下五島地域（五島市）と呼称する。両地域は同じような大地、生態系、歴史文化を有している。

申請地域は、五島列島のうち申請準備が整ったと判断した下五島地域（五島市）の大部分を範囲とするが、将来的には上五島地域をも含めた範囲の拡大も視野に入れている。よって、申請地域の名称を「五島列島ジオパーク構想」とする。



五島列島ジオパーク構想

GOTO Islands GEOPARK Plan

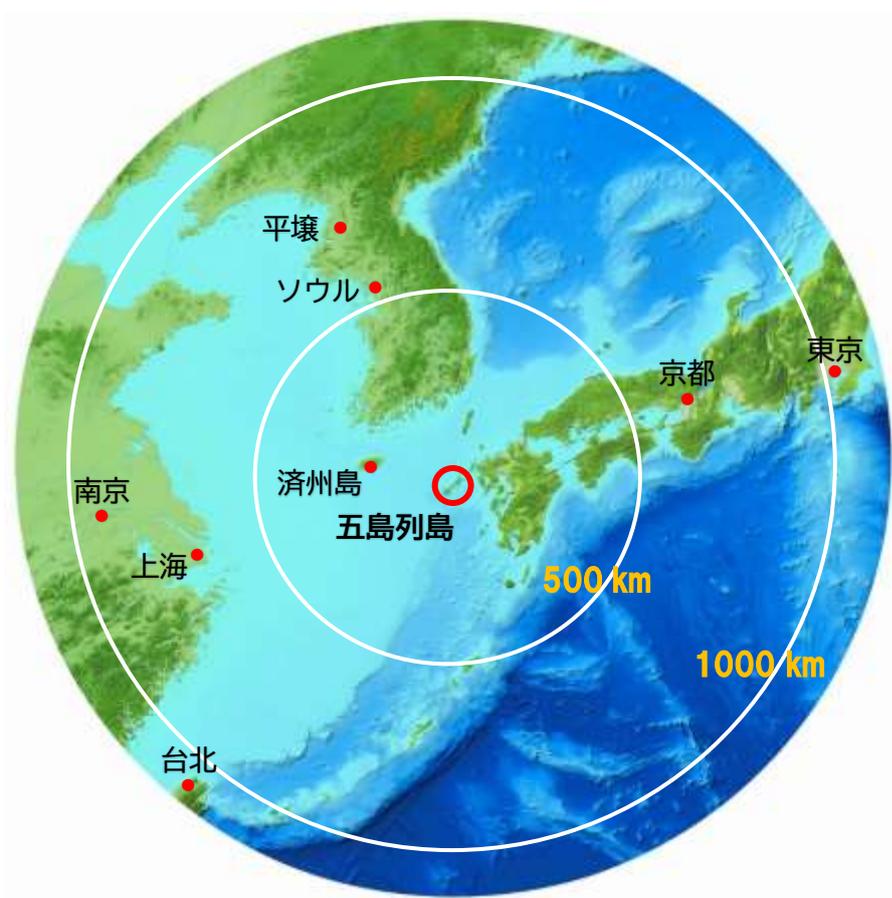
五島列島ジオパーク構想のロゴマーク

虹は「大地・生態系・歴史文化」を示し、「大陸との懸け橋」を意味する

A-2 位置

五島列島は、日本列島の西端に位置するとともに、東シナ海北東部の一角を占める。

申請地域である五島列島下五島地域から最も近い都市・長崎市までは、福江島東部より直線距離で約 100 km である。また、韓国・済州島まで直線距離で約 200 km、朝鮮半島の南端まで直線距離で約 250 km と近い位置にある。京都と上海が申請地域から直線距離で約 650 km であるため、申請地域は近代以前に陸路・海路によって京都から中国沿岸部（上海など）に向かう際の中間地点であった。



申請地域の位置

A-3 面積 (km²)

申請地域の面積は、島々からなる陸域 415.4 km² と周囲の海域 1,240.0 km² を合わせた 1,655.4 km² である。

A-4 自然地理・人文地理学的特徴の概要

A-4-1 地勢

申請地域である五島市は、大小 63 の島々からなる。そのうち、主たる 3 つの島（奈留島・久賀島・福江島）をはじめ 11 の島で人々が暮らしている。

奈留島はヤツデのような形であり、複雑に入り組んだ大小の入り江が、大地の成り立ちと人々の暮らしに密接に関わっている。久賀島は馬蹄形であり、島の大きさに対して比較的大きな 2 つの谷を中心に低地が広がっている。福江島では、北東-南西方向に連なる山々と同じ向きに大きな川が流れ、玉之浦や奥浦などの海岸はリアス海岸である。そして福江島の中心部では山内盆地が位置する。福江半島・富江半島・三井楽半島などは火山による溶岩台地で、非常になだらかな形をしている。黄島・赤島・黒島・嵯峨ノ島なども同じ火山島である。



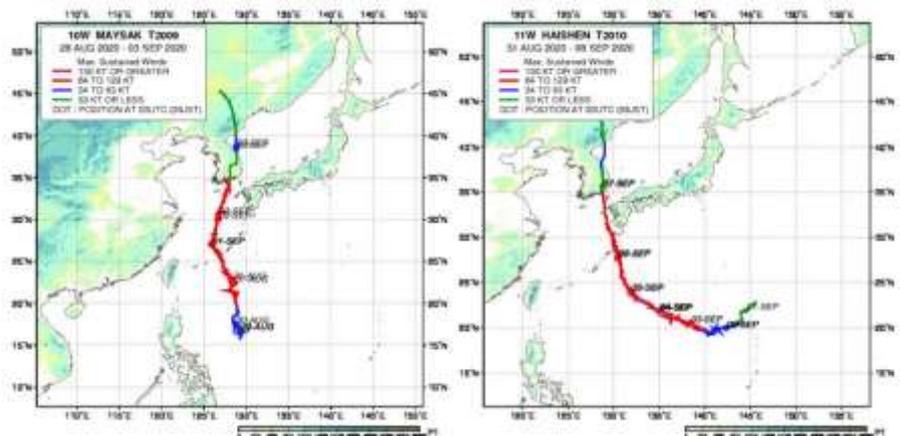
申請地域の地勢

A-4-2 気候

申請地域は、対馬暖流の影響が大きく、冬は暖かく夏は比較的涼しいといった海洋性の気候区（西海型気候区）に属している。2020 年の平均気温は 17.4℃で対馬暖流の影響を受け比較的温暖で、年間降水量は 3,184 mm（2020 年）となっている。

冬場は、シベリア高気圧による大陸からの北西の季節風が強く吹くことが特徴である。

申請地域は、夏から秋にかけて台風が常襲する地域であるが、五島列島の西側を通過するとしばしば甚大な災害をもたらすことがある。



2020 年 9 月の台風 9 号、10 号の進路図

A-4-3 生態系

申請地域の植生は、全域がヤブツバキクラス域（暖温帯）に入り、スダジイ林、タブノキ林などの照葉樹二次林が優占している。

植物では、申請地域の西側を北上しながら流れる対馬暖流の影響を受け、ヘゴ、ハマジンチョウなどの亜熱帯系の植物の自生北限地となっているほか、島内各地の灌漑用ため池でもタヌキアヤメなどの南方系の水生植物や湿地植物の北限地も確認されている。いずれも、天然記念物として保護が図られている。

鳥類では、大陸に近いという地理的特性から、渡り鳥の経路(中継地)となっており、ハチクマなどの渡りがよく知られている。昆虫のうち蝶類では、台湾や東南アジアなどからリュウキュウムラサキやカバマダラが飛来する。秋には大陸系のトンボであるスナアカネも見られる。

海域では、各所で造礁サンゴやソフトコーラルも確認される。



波静かな海岸に自生するハマジンチョウ

A-4-4 歴史

五島列島の歴史には、日本の西端であるだけでなく、東シナ海交易の拠点の一つであることなど、地理的位置が大きく関わっている。

8世紀初頭から9世紀後半にかけて、遣唐使船が唐へと渡る際の最終寄港地として利用され、空海、最澄が乗った遣唐使船も唐へと渡る際、五島列島に立ち寄ったとされる。遣唐使制度廃止後も、中国商船の博多・大宰府への中継地として交易の拠点の一つであった。

中世には、東シナ海周辺地域を中心に倭寇が活発化ようになるが、その海上拠点の一つであった。彼らは単に海賊行為を行っていたというわけではなく、通商を通じて独自の海上ネットワークを築いており、そのことが大航海時代を迎えていた西欧諸国との接触をもたらした。

江戸時代後期には、五島藩の移住政策により、大村藩領外海地方から「潜伏キリシタン」が移住し、現在の五島列島の多様な宗教文化の一つとなった。

江戸時代末期には、国境離島地域として、日本近海に頻繁に出没するようになった外国船に対応するため、日本最後の海城である福江城（石田城）が築かれた。



遣唐使船の寄港地「川原の浦」

A-4-5 社会

1889年の町村制施行においては、申請地域の自治体は、長崎県南松浦郡に属し、13の村がそれぞれ単独村制にて発足し、大正、昭和期の町村制施行を経て、1954年からの昭和の大合併にて、福江市、富江町、玉之浦町、三井楽町、岐宿町、奈留町の1市5町となった。

この1市5町は、下五島地域として、消防や福祉分野などにおいて広域行政を展開してきた経緯もあり、社会的、経済的にも結びつきの強いエリアを形成してきた。

今世紀に入り、平成の大合併が推進されていく中、2004年8月1日、上記の1市5町が合併し、五島市が誕生した。

申請地域の社会構造としては、本土から距離的に離れた「離島」であるが、近世～近代にかけての漁業集団の移住による外部との交流が盛んであったという歴史的経緯もある。同じ島でも、地域ごとに独自の発展を遂げてきており、その違いが地域独特の民俗行事などに色濃く表れ、バラエティに富んだ社会構造となっている。

また、同じ地域の共同体・コミュニティとしての結びつきが強く、青年団・消防団活動が非常に活発で、そのことが地域の伝統行事の継承にもつながっている。

合併後の新市においては、様々な施策が統一した理念のもとで実施されることになり、地域ごとの特色が薄れていくことも懸念されることではあるが、ジオパーク活動は、大地の成り立ちとその上に育まれた歴史・文化の意味を知ることにつながり、地域ごとの特色をあらためて再認識することにつながっていくものと期待できる。

A-4-6 経済

かつて申請地域である五島市では、その豊かな大地と海の恵みを活かした農林水産業（第1次産業）が盛んであった。農業は、肉用牛や葉タバコが主幹作物で、最近ではブロッコリー、中玉トマト、高菜の産地化を進めている。漁業は、東シナ海を回遊する多種多様な魚（アジ、サバ、ブリなど）が四季折々に来遊するなど、日本屈指の好漁場となっている。近年では、クロマグロの養殖基地化としても発展してきている。

申請地域である五島市の産業別人口割合は、2015年の国勢調査によると第1次産業が15.3%、第2次産業が13.0%、第3次産業が70.2%である。7割を占めている第3次産業の中でも、医療・福祉、卸売・小売業、宿泊業、飲食サービス業の割合が高くなっている。なかでも、豊かな自然資源や世界遺産などの歴史文化資源を活用した観光産業は、五島市における主要産業として発展してきた。

観光の振興

平成30年7月、五島市の「久賀島の集落」と「奈留島の江上集落」の2つの構成資産を含む「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録され、その受入環境整備として地方創生拠点整備交付金を活用し、平成29年度に久賀島観光交流拠点センターを設置した。
また、有人国境離島法の潜在型観光の促進を遂行し、日本遺産など数多く存在する観光資源の働き上げや受入体制整備を実施した。これにより、観光客数は年々増加し、目標とする26万人まであと一歩のところまで来ている。



申請地域（五島市）の観光客の推移

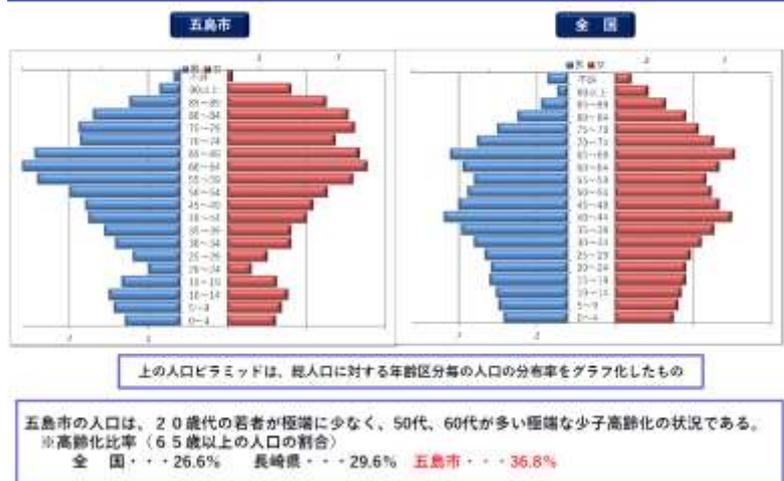
A-4-7 人口

申請地域である五島市の人口は、1955年の91,973人（18,596世帯）をピークに、その後減少し続け、2021年3月末現在、約35,809人（19,672世帯）である。

離島という地理的条件のため、高校卒業後は地域外の都市に転出せざるを得ず、また高等教育や職業訓練を受けても、地域内において十分に能力を発揮できる職業が限られるという事情がある。

しかしながら、近年、申請地域である五島市の積極的な移住促進策によって、2019年と2020年の2年連続で社会人口増加を達成している。今後、移住者と地域住民が一緒になった、地域の魅力を再発見する取り組みが広まることで、地域を語る人が増えれば、社会人口増加傾向の維持に直接的に寄与するものと考えられる。

人口ピラミッド（5歳毎階級別）



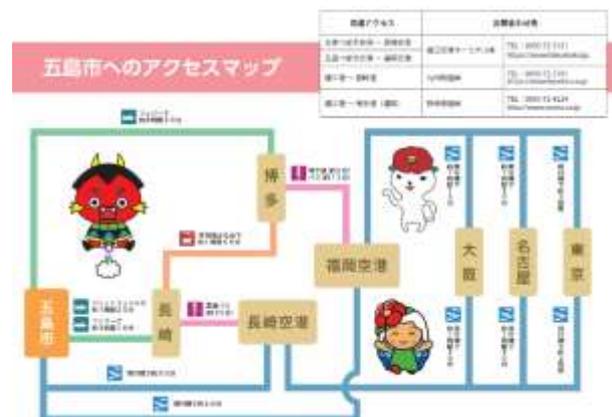
申請地域（五島市）の人口ピラミッド

A-4-8 交通

申請地域である五島市からは、福岡市や長崎市といった都市へ向かう、空路と海路の定期便が運航している。五島列島と福岡市の博多港を結ぶ「フェリー太古」は、かつて遣唐使船が辿ったとされる航路と同じような航路を運航しており、歴史を感じながら、自然が作り出した五島列島の美しい景観を楽しむことができる。地域を構成する島々のうち、有人島については、定期船によって福江島との往来が可能である。

島内移動に関して、福江島と奈留島では路線バスが運行されており、拠点施設である鑑瀬（あぶんぜ）ビジターセンターや各ジオサイトなどへ訪れることが可能である。

また、福江市街地周辺や嵯峨ノ島では、電動自転車を利用でき、福江島内の移動が路線バスのみでは困難である場合、レンタカー（特に、電気自動車）が利用できる。



申請地域（五島市）までの交通手段

A-5 運営組織

運営組織である五島列島ジオパーク推進協議会は、2017年6月の発足以降、基本計画の策定から取り組み内容に至るまで五島列島ジオパーク構想の方針を決めてきた組織である。

2021年4月20日現在、協議会は「総会」「幹事会」「グループ」「学識顧問」「ジオパークアドバイザー」「事務局」からなり、地域団体や民間企業、大学教員、行政（国・県・市）で構成している。

このうち「グループ」は、基本計画・行動計画に沿い、個別課題や具体的な活動内容の企画・検討をしながら活動を推し進める場となっている。

申請組織のメンバーは、以下のとおりである。

商工・観光：福江商工会議所会頭、五島市商工会会長、
（一社）五島市観光協会会長

交通：五島自動車（株）代表取締役、九州商船（株）取締役、
福江空港ターミナルビル（株）代表取締役社長

教育・文化：五島市文化財保護審議会会長、五島文化協会会長

地域代表：おくうら夢のまちづくり協議会会長、三井楽まちづくり協議会会長

農協・漁協：ごとう農業協同組合代表理事組合長、五島ふくえ漁業協同組代表理事組合長

民間活動団体：五島市おもてなしガイド連絡協議会会長、五島自然塾代表

行政：環境省五島自然保護官事務所保護官、長崎県県民生活環境部部長、
長崎県五島振興局長、五島市長、五島市議会議長、五島市教育長、
五島市総務企画部長

A-6 連絡先

五島列島ジオパーク推進協議会事務局

（五島市役所総務企画部政策企画課ジオパーク推進班内）

電話番号：0959-72-6782

メールアドレス：kikaku@city.goto.lg.jp

A-7 ウェブサイト

「五島列島ジオパーク推進協議会」ホームページ

（五島市ポータルサイト「まるごと」内）



A-8 SNS

(1) Facebook

専用アカウント「五島列島ジオパーク推進協議会」では、ジオツアーの案内や報告、ガイド講習会、学校教育における授業の様子、その他イベント等のお知らせなど総合的におこなっている。文章と写真の両方をもってお知らせすることで、活動の様子をわかりやすく伝えている。



推進協議会アカウント



五島列島ジオスタグラム

(2) インスタグラム

専用アカウント「五島列島ジオスタグラム」では、写真主体で投稿している。五島列島の「美しい自然」を対象としたアカウントは個人・組織問わず多数あるものの、このアカウントでは「五島列島の風景はなぜ美しいのか」、「当たり前風景の中から地域を見つめ直す」というジオパーク活動から見た五島列島を主に取り上げている。

(3) YouTube

申請地域の見どころを専門員と一般人の2人で回る街ぶら系番組「五島列島ジオチャンネル」を開設し、月に1本のペースで公開している。この番組は、誰でも大地とのつながりを楽しみながら感じられるように、やさしい内容となるよう心掛けて制作した。2020年6月の開設から2021年4月現在までに、合計15,000回以上再生されている。これらの動画は一般公開するだけでなく、学校教育における地域学習のコンテンツとしても利用されている。



五島列島ジオチャンネル



B 提出書類一覧

1. 申請書
2. 申請書の別添書類
 1. 自己評価表
 2. 申請地域の地図
 3. 申請地域の地質学と地理学の概説
 4. 申請地域におけるジオパークと関わりのある文献リスト
 5. サイトリスト
 6. ジオツアーの実績一覧表
 7. その他
 - (1) 基本計画・行動計画（アクションプラン）
 - (2) 課題解決に向けた取り組み（審査結果）
 - (3) 指定文化財一覧
 - (4) 令和2年度ジオパーク学習実践事例集
 - (5) 学校教育アンケート結果
 - (6) パンフレット
 - (7) ジオガイド養成講座カリキュラム一覧
 - (8) GOTO!ジオ通信、わたしのイチオシほか
（全世帯配布チラシ・広報ごとう掲載記事）
 - (9) 新聞掲載記事
 - (10) 「ふるさと長崎県（発行：長崎県教育委員会）」掲載記事
 - (11) 「総務省情報誌（発行：総務省）」掲載記事
 - (12) 「月刊 食と健康（発行：公益社団法人日本食品衛生協会）」掲載記事
 - (13) YouTube 番組「五島列島ジオチャンネル」チラシ
 - (14) 市民の取り組み一覧
 - (15) 絵本「ごとうのやまのおよめさん」（発行：郷土史家 中村真由美 氏）
 - (16) 漫画「山内のお米が美味しい理由」（制作：長崎県立五島高等学校）
 - (17) 五島の魅力再発見のためのガイド
～岐宿・魚津ヶ崎を拠点に～（制作：五島自然塾）
 - (18) きしく サイクル&ウォーク フラワーロードマップ（制作：五島自然塾）
 - (19) 知らなかった！五島の自然（制作：五島自然塾）
 - (20) 奈留島ジオマップ（発行：NPO 法人 DONDON 奈留）

C 地域の位置

五島列島は、北東—南西方向に連なる主たる5つの島（中通島・若松島・奈留島・久賀島・福江島）をはじめ152の島からなる。申請地域は、奈留島・久賀島・福江島など11の有人島と52の無人島からなる五島列島南部の下五島地域（五島市）のうち、男女群島と肥前鳥島を除いた範囲である。申請地域の北東部は、海域において上五島地域（新上五島町）の若松島とは滝ヶ原瀬戸（約800m）との中間線によって分けられる。申請地域の範囲は、東端（32°45'17.353"N, 129°02'2.539"E）、西端（32°36'55.954"N, 128°30'36.462"E）、南端（32°32'39.752"N, 128°43'46.241"E）、北端（32°02'10.235"N, 128°45'58.489"E）である。

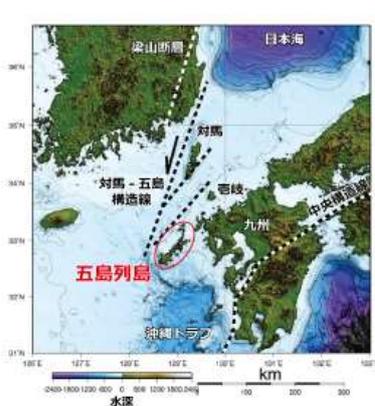


D 主要な地質地形学的特徴（見どころ）と他の要素

五島列島の大地は、日本海拡大時の約 2200～1700 万年前に堆積した層厚約 3,000 m の陸成層（五島層群）からなる（右図）。日本海拡大に関連するジオパークは多数あるが、五島列島のように陸成層が広く分布するジオパークはない。これは、日本海拡大時に五島列島を海が覆わなかったことを意味している（下図）。五島列島には、火山性堆積物・河川堆積物、そしてそれらが変形した地質構造を詳細に記録した地層が分布する。この重要な地層が、東シナ海の荒波による侵食を受け、それぞれの島を取り囲む数 km にわたる大断崖をなしている。五島列島の大断崖に刻まれた記録を紐解くことで、ユーラシア大陸東縁部の拡大初期段階の環境変遷、テクトニクスを明らかにすることができる。



日本海拡大時の陸成層
（島山島西海岸）



五島列島の位置
(Kiyokawa et al. 投稿中に加筆)



2500万年前の日本列島
日本海拡大前後の日本列島（平，1990 に加筆）
★は五島層群の堆積した位置



また、約 100 万年前以降に活動した独立単成火山群の福江火山群（活火山）も見どころのひとつである。単成火山群は、伸張応力場もしくは低マグマ供給とされる大陸内地域で多く見られるが、圧縮応力場の日本列島では 3 箇所と数が少ない。申請地域では、福江島の北西側と南東側の半島および周辺の島々において、アルカリ玄武岩質の溶岩流を流し、スコリア丘や溶岩台地、溶岩トンネルを形成している。現在も 15 のスコリア丘を確認でき、侵食によりその断面が見えるものもある。



鬼岳・火ノ岳と鏡瀬溶岩海岸

特に、約 1.8 万年前に活動したとされる鬼岳は、スコリア丘の形状や溶岩流の流出形態、降下スコリアの堆積状態などが良好に保存されている。また、富江地区の溶岩トンネルの井坑（いあな）は、総延長 1,420 m といわれ、トンネル内には溶岩が流れた様子を良好に保存しており、日本でも有数の溶岩トンネルである。

以下、五島列島の地質地形の影響を受けた3つのポイントについて紹介する。

●大陸とのつながり

- 五島列島はユーラシア大陸の東端部に位置し、大陸上を流れていた河川や湖に堆積した地層からなる。約1700万年前、日本海拡大に伴い日本列島が誕生するが、五島列島周辺は最後まで大陸と陸続きだった。約1万年前以降の海水準上昇によって、五島列島と大陸は大海原で隔てられた。



遣唐使最後の寄港地 柏

- 奈良～平安時代には、進んだ文化を取り入れるために大陸を目指す人々（遣唐使）が現れ、大陸に最も近い五島列島は日本最後の寄港地となった。都の貴族や仏僧が立ち寄り、航海安全を願って多くの神社が建立され、万葉集に紹介される多数の歌が詠まれた。

鎌倉～室町時代には、九州北西部の松浦党を中心とする「倭寇」が大陸と九州の両方で活動していた。五島列島には、倭寇の拠点だったと伝えられる勘次ヶ城の石垣が残る。



大陸に渡るハチクマ

- 大陸を目指したのは人間だけではなく、タカの一種のハチクマなどは五島列島を中継して約700km離れた大陸に渡っている。

●複雑な海岸と潜伏キリシタン・漁業

- 約700万年前以降、北部沖縄トラフ拡大に伴い、五島列島南方の大陸棚に亀裂が入り、水深600mにもなる五島海底谷が形成された。五島列島の大地も北東—南西方向に引っ張られ、島々を分かつ海峡、各島内の多数の割れ目が形成された。この割れ目にそって侵食が進み、各島の北西—南東方向に延びる湾や盆地が生まれた。



江上天主堂

- 大きな入江は生活に適していたため、古くから人々が住みつき集落（仏教・神道）が形成された。そのため、江戸時代に移住した潜伏キリシタンはより急峻な小さな入江や未開拓地に身を潜めた。



五島の豊富な魚
(きびなご)

- 一方で、五島列島周辺は、浅い大陸棚と五島海底谷・沖縄トラフの深い海が出合う場所、南方から対馬暖流が北上する場所に位置するため、豊富な魚種が獲れる漁場となった。

●火山活動と農業・石文化

- 第四紀単成火山群による粘性の低い玄武岩質溶岩は、平野が少なく山がちであった五島列島に、住みやすく耕作しやすい溶岩台地をもたらした。



円畑（まるはた）



五島牛



富江陣屋石蔵

- 日当たりと水はけのよい溶岩台地は畑作や放牧のための草原に適しており、五島の基幹産業である葉タバコやサツマイモ、五島牛の生産につながった。また、石垣や倉庫などには、手近に入手可能で強度のある玄武岩質溶岩が活用された。

E ユネスコ世界ジオパーク基準の検証

E-1 領域

E-1-1 地質地形遺産及び保全

(1) 地質・地形遺産の概要

申請地域は、新第三紀にできた陸成層である五島層群を基盤とし、日本海や沖縄トラフといった背弧海盆の拡大の記録が残った場所である。ここでは、西南日本回転の極付近に位置したが、日本海拡大による海の侵入がなく、陸成層が約 3,000 m と厚く堆積し日本海に大量の土砂を供給した記録が残る。背弧海盆形成初期の大地分裂時の環境変遷をたどれる、日本でも数少ない場所である。五島列島では3回の一大地質イベントが起こっている。

① 日本海拡大の影響を受けて誕生した五島列島の大地(2200-1200 万年前頃)

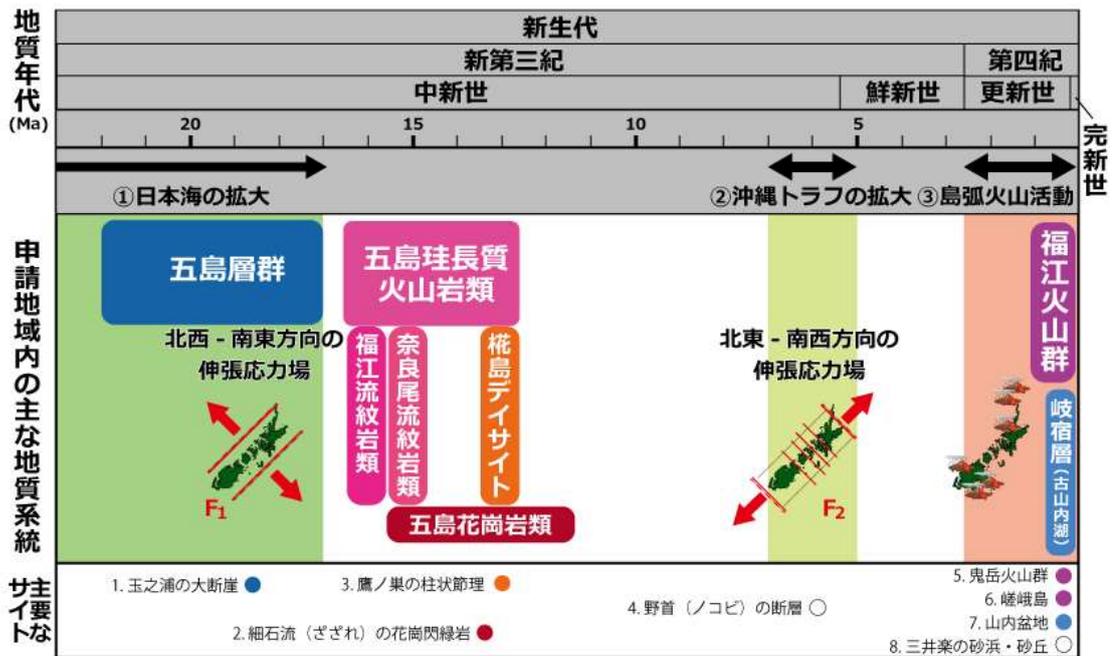
新第三紀中新世の日本海拡大に伴う堆積盆の形成による陸成層、珪長質マグマの火成活動による花崗岩類・流紋岩類が申請地域の大部分を占める。

② 沖縄トラフ拡大の影響を受けてできた五島列島(700 万年前頃)

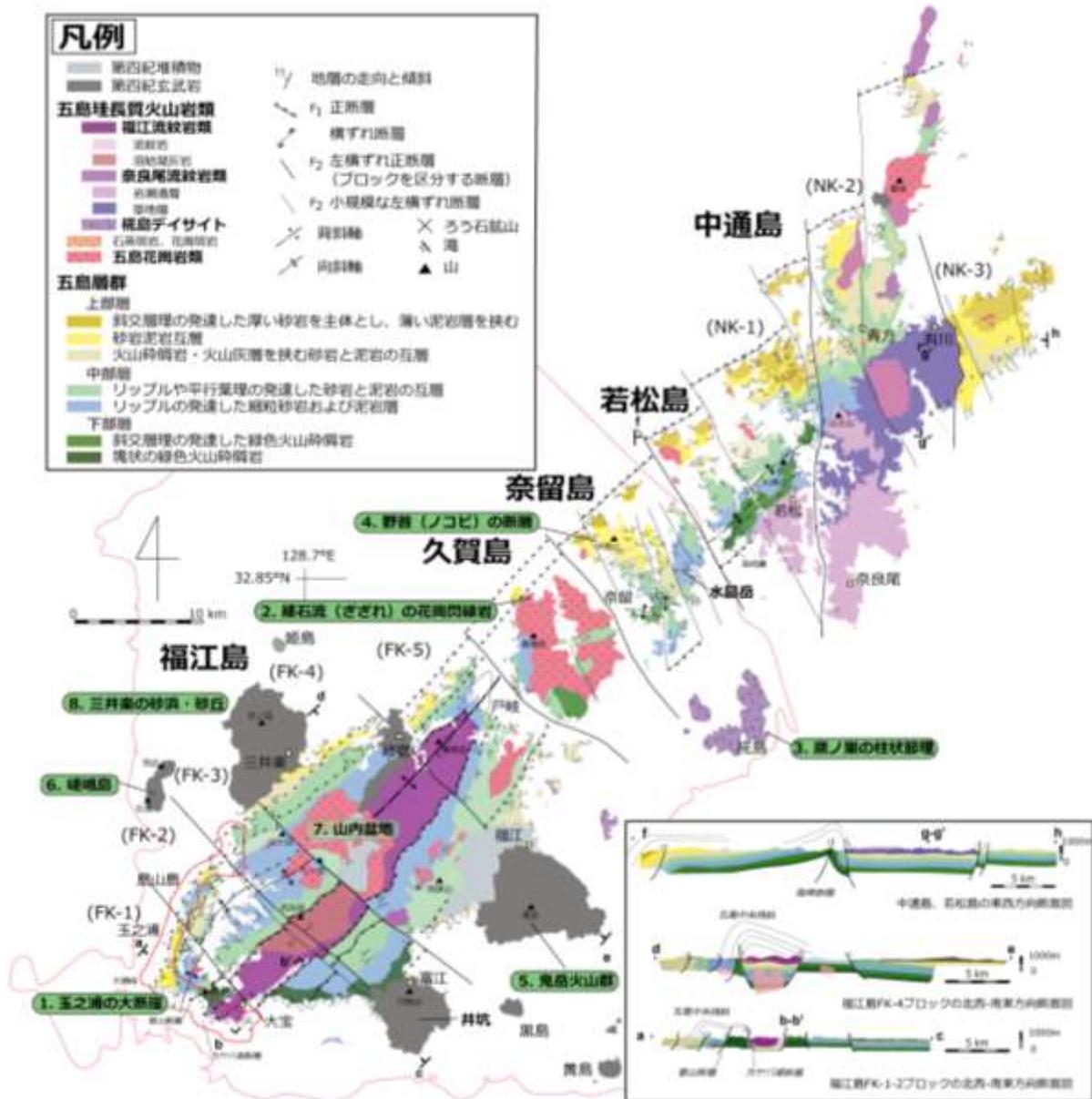
新第三紀中新世後期の沖縄トラフ拡大開始に伴う伸張場において、五島海底谷とこれと同方向の海峡ができ、五島列島の基本となる5つの島々に分かれた。

③ 五島列島に平坦な台地をもたらした火山活動(100 万年前～)

福江島の鬼岳周辺、富江半島、三井楽半島、岐宿、および周辺の島々には、第四紀の単成火山群である福江火山群の火山岩が点在している。福江火山群は、山口県の阿武火山群、静岡県伊豆東部火山群と並んで日本で3箇所しかない単成火山群の活火山である。



申請地域の主な地質系統



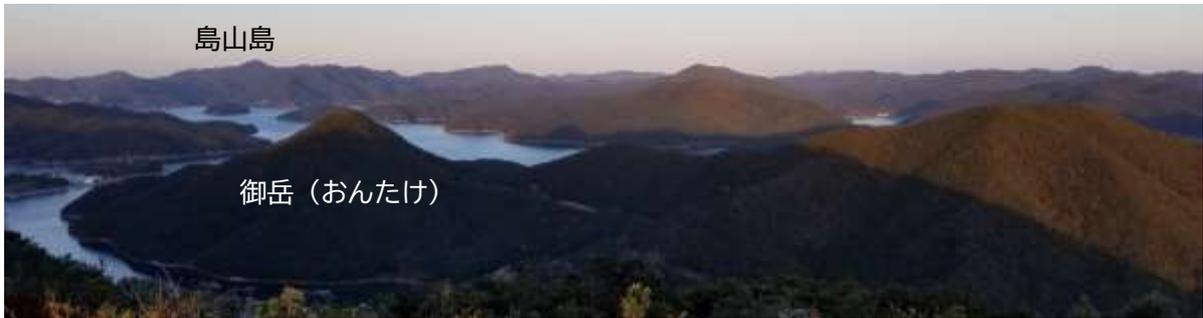
申請地域の地質図 (Kiyokawa et al. 投稿中に加筆)

申請地域には、新第三紀の五島層群（下部：緑色、中部：水色、上部：黄色）、流紋岩類（紫色）、花崗岩類（赤色）、および第四紀の玄武岩類（灰色）が分布する。地層は基本的に緩い傾斜であるが、各島の北西海岸では地層が北西向きに急傾斜する変形構造が確認されている。これは、北東—南西方向（五島列島の島々の並び方向）の北西落ち正断層（ F_1 ）によって、地層がドラッグ褶曲したものとされる。また、五島層群および流紋岩類・花崗岩類を切る北西—南東方向（島々間の海峡の方向）の左横ずれを伴う正断層（ F_2 ）も確認されている。これら2つの断層は五島列島の形を大きく制約している。なお、第四紀の玄武岩類は、 F_1 と F_2 の交点に玄武岩質マグマが上昇し、地表に噴出したものとされる。

④ 五島の大地を特徴づける地形

申請地域の地形は、新第三紀の2回の断層運動と第四紀の火山活動によって特徴づけられる。

五島列島は、北東—南西方向の正断層活動（F₁）によって地塁化し、その後の北西—南東方向の正断層活動（F₂）によって海峡が形成され島々に分かれた。この間、断層などを中心として大地が侵食され谷ができ、奈留島、久賀島、福江島などの複雑な海岸線が形成された。



福江島・玉之浦の複雑な海岸線（大瀬山より北東を望む）

第四紀に活動している福江島とその周囲の島々に分布する福江火山群は、玄武岩質溶岩の台地とスコリア丘を形成しており、台地は人々の生活の場として活用されている。



福江火山群のスコリア丘と周囲の火山島（鬼岳園地より南を望む）

福江島中央部では、約94～68万年前の岐宿地域における溶岩噴出により、山内盆地を通る鱈川（わにがわ）下流域がせき止められ、古山内湖が形成されたとされる。その後、湖の水は鱈川により排水され、五島列島では他にない盆地が形成された。



稲作がさかんな山内盆地（山内盆地展望所より南を望む）

(2) 主要な「地質・地形サイト」の概略とその価値

申請地域内の地質・地形サイトは、30箇所を選定している。ここでは、主要な地質・地形サイト8箇所を、五島列島の成り立ち順に説明する（それぞれの場所を「申請地域の地質図」に記載）。その他の地質・地形サイトについては、添付資料のサイトリストを参照されたい。

<① 日本海拡大の影響を受けて誕生した五島列島の大地(2200-1200 万年前頃)>

サイト1 玉之浦の大断崖 | 日本海拡大に伴う堆積盆の形成と地層の変形

日本海拡大時に、大陸縁辺部にできた湖や川に堆積した地層とその地層を大きく変形させた地殻変動に触れることができる。



島山島西海岸インヤマ瀬北の五島層群



赤四角の拡大写真（左端に人）



丹奈西海岸の急傾斜層

本サイトは、福江島の主要な観光名所である大瀬崎を含む長さ 21 km にわたる海岸線の大露頭で、高さは最大 150 m になる。約 2200~1700 万年前に堆積した、陸成層の五島層群が広く露出している。緑色火山碎屑岩からなる下部層、砂泥互層の中部層、砂岩主体の上部層が観察でき、五島層群堆積時の環境変化をたどることができる。つまり、①火山活動が活発な時期、②湖や河川で砂や泥が堆積する時期、そして③三角州で砂が急激に堆積していく時期への変化であり、これは大陸縁辺部でのリフト活動を反映していると考えられる。

また、大宝崎付近では五島層群を覆う約 1650 万年前に噴出した流紋岩類が露出しており、五島層群堆積後、再び火山活動が活発化したことを示す。

これらの地層は正断層系によって変形しており、緩い傾斜の地層と断層によってドラッグされ急角

度に傾斜する地層が繰り返し見られる（丹奈西海岸、星山南海岸）。この変形構造は、五島層群の堆積時から続く伸張場によって引き起こされたものと考えられる。本サイトは、背弧海盆拡大の伸張場における堆積作用と地層変形を圧倒的なスケールで体感することのできる場所である。

サイト2 細石流（ざざれ）地域の花崗閃緑岩 | 新第三紀火成活動の地下の様子

ここでは、日本海拡大後の五島列島の地下の様子を観察することができる。申請地域の中部に位置する久賀島には、五島列島の中で唯一、花崗岩類（約 1500 万年前）が広く露出する。久賀島北



細石流の花崗閃緑岩



マグマ混交の露頭

部の細石流では花崗閃緑岩が見られ、数十 cm の暗灰色の包有物を含み、所々で水玉模様になっている。包有物は母岩に比べて二酸化ケイ素が少なく、鉄、マグネシウムに富んだ玄武岩質の岩石である。日本海拡大後の五島列島の地下では、花崗岩質マグマと玄武岩質マグマが不均質に混ざり合っていたことがわかる。

サイト3 鷹ノ巣の柱状節理 | デイサイト火山島

ここでは、日本海拡大後の火山活動を感じることができる。久賀島の南東に位置する椀島は、全島がデイサイト質溶岩からなり、K-Ar 年代で約 1260 万年前の年代値が得られている。溶岩が冷却する際に垂直方向に発達した柱状節理が海岸線の多くの場所で見られ、特に鷹ノ巣崎周辺



鷹ノ巣の柱状節理



鷹ノ巣がんぎ

では高さ 100 m 以上の断崖をなしている。ここでは幅 2~3 m の玄武岩質貫入岩が何条か見られ、そのうちの 1 条は、水平方向に割れ目ができ侵食により階段状となっている。この貫入岩は「鷹ノ巣がんぎ（がんぎは階段を意味する方言）」と呼ばれ、空海が修行するために上ったという伝説が残っている。

<② 沖縄トラフ拡大の影響を受けてできた五島列島（700 万年前頃）>

サイト4 野首（ノコビ）の断層 | 5つの島々を作った断層活動

野首には、五島を主要な 5 つの島々に分けた断層活動の痕跡が残る。申請地域の北部に位置する奈留島の野首（ノコビ）浦では、沖縄トラフ拡大の影響で活動したとされる北西—南東方向の左横ずれ正断層を観察できる。幅約 50 m の破碎帯を有し、断層を挟んだ層序の違いから、縦方向の変位量は数百 m と考えられる。同方向の断層は各島の間に見られ、この断層により 5 つの主要な島々に分断され、また久賀島の馬蹄形や奈留島の細長い湾が形成されたとされる。



破碎帯

野首（ノコビ）の断層

<③ 五島列島に平坦な台地をもたらした火山活動（100 万年前～）>

サイト5 鬼岳火山群 | 第四紀単成火山の火山体と噴出物

第四紀の単成火山群である福江火山群のうち、鬼岳周辺の 11 の単成火山を総称して鬼岳火山群と呼ぶ。約 50 万年前より噴火活動を開始し、最も新しいものは約 1.8 万年前に活動した鬼岳である。給源は不明であるが、約 2300 年前の降下スコリア層が確認されていることから、鬼岳火山群を含む福江火山群は活火山とされている。



鬼岳スコリア丘

鬼岳スコリア丘を中心に 2 km 圏内に降下スコリア堆積物、溶岩などの噴出物が良好に保存されており、散策しながら第四紀単成火山の活動史をたどることができる。

鬼岳では景観保護のため、3 年に 1 度、野焼きが行われている。



鬼岳降下スコリア堆積物



燈瀬溶岩海岸



鬼岳の野焼き

サイト6 嵯峨島 | 第四紀単成火山の断面と火砕サージ堆積物



女岳（めだけ）の火山海食崖

嵯峨島は、男岳（おだけ）と女岳（めだけ）という 2 つの単成火山の噴出物がつながってできた「ひょうたん」型の火山島である。波による侵食のため両火山体とも断面が露出し、火山体内部の高温酸化・成層した赤色噴出物やこれに貫入するマグマが固まった白色岩体を観察することができる。普段見ることのできない火山体の内部構造を明瞭に観察できる貴重な場所として長崎県指定の天然記念物となっている。また、「嵯峨島千畳敷」では、火砕サージによるスコリアや火山灰などの堆積物が幾重にも重なった地層が広く露出し、マグマ水蒸気爆発の痕跡を観察することができる。



嵯峨島千畳敷の火砕サージ堆積物

<④ 五島の大地を特徴づける地形>

サイト7 山内盆地 | 盆地の形成と湖の堆積物

福江島の中央部に位置する山内盆地には五島有数の沖積地形がみられる。岐宿溶岩の堆積による谷のせき止めで誕生したとされる山内盆地には、基盤岩となる花崗岩類の上に第四紀の沖積層（岐宿層）が堆積しており、ボーリング調査結果から、沖積層堆積以前は凹凸のある山地であったと推察される。

中期更新世に谷の下流側における岐宿溶岩の堆積後に、山地から大量の土砂が運ばれるイベントが起こった可能性がある。また、中期更新世末から後期更新世には、盆地内に複数の段丘が形成され、それらの構成層からは湖や湿地の堆積物が観察できる。中でも「高師小僧」は、イネ科の植物の茎の周りに集まった鉄分が残ったものである。特に、ここでは同じ方向に複数みられることから、植物が生えていた当時の湿地環境そのままの様子が観察できる。



山内盆地の表層地質は
湖成・河成堆積物からなる



湖成層中でみられる高師小僧（赤線内）
・マツボックリ（左上）・広葉樹の葉（左下）
の大型植物化石

サイト8 三井楽の砂浜海岸 | 人為の少ない砂の地形（砂浜・砂丘）

福江島の北西部・三井楽地区周辺の海岸は、西海国立公園の指定によりこれまで保護されてきており、人為の影響が少ない砂の地形がよくみられる。

三井楽地区周辺の海岸の砂は、後背の山地からだけでなく、周辺の海域から供給される貝やサンゴ片も多分に含まれている。周辺海域では過去数十年の海水温上昇もあり、造礁サンゴが多く分布している。

これらの破片が冬の北西季節風により、浜に供給されるだけでなく、吹き上げられることで山地側に砂丘も形成されている。広い浜の上ではウエーブリップルなどの堆積構造が明瞭であり、砂の地形や堆積構造を観察するのに最適な場所である。



高浜海岸の砂浜と砂丘

(3) 地形・地質遺産の保全

① 地質・地形遺産の保全の方針

まもる！：大地を語る上で欠かせない重要な地域資源を守り、将来にわたり活用する

申請組織の地質・地形遺産保全の方針は、地域住民がその遺産の価値、重要性を理解した上で、保全を優先しつつ、活用していくことである。そのために、短期的な目標として、2021年度には、2020年度から引き続き、サイトカルテの作成、サイトごとに地域住民と保全協議を行う。また、中期的な目標として、2024年度までに全サイトの保全計画を策定し、将来にわたり遺産を保全、活用していく体制を確立する。

② 地質・地形遺産の保全の取り組み状況

●サイトの設定

地質・地形サイトは、地域団体である五島自然塾作成の「ジオサイト候補地（案）マップ」を参考にしながら、長年五島列島をフィールドとして調査・研究を行ってきた学識顧問と相談して、学術的価値に重点を置いて設定した。また、学識顧問が行う調査に同行し、各地の学術的意味を指導いただき、住民が見つけた新たな露頭の調査をお願いした。

自然サイト、文化サイトについては、学識顧問・地域住民と相談を重ね、学術的価値を有し、五島列島の大地やテーマである「大陸との懸け橋」との関連性をもったものを設定した。

サイトは全体で53となり、内訳はジオサイトが30、自然サイトが11、文化サイトが12である。そのうち、西海国立公園内のものが14サイト、世界文化遺産が1サイト、日本遺産が1サイト、国指定天然記念物が1サイト、県指定天然記念物が12サイト、市指定天然記念物が4サイト含まれている。

●水晶岳保全に関する地域住民との協議

奈留島の水晶岳は日本でも数少ない日本式双晶の産地であり、市指定天然記念物や日本地質学会の「県の鉱物」であるが、盗掘が後を絶たない。盗掘により貴重な鉱物が無くなるばかりか、水晶岳の山体、ひいては生態系が壊され、斜面崩壊などにつながる危険性もある。2019年の日本ジオパーク新規認定審査時には、「ジオサイトとして位置づけ、保全する意思とビジョンをもつことが望ましい」との指摘をいただいた。これを受け、2019年12月より、奈留島住民、五島市役所奈留支所、五島市教育委員会、協議会事務局で、水晶岳保全に関する協議（現在までに計4回）を行っており、①水晶岳に水晶採集禁止の看板設置、②五島市HPでの水晶採集禁止の周知、③水晶岳入山ル



奈留島の日本式双晶



盗掘の状況

ールをまとめたチラシの配布、の3点を決定した。

最も時間を割いたのは水晶岳入山のルール作りで、全面立入禁止、立入制限、条件付き立入許可の3案で検討を行った。保全と活用のバランスを取りながら協議を重ねた結果、立入制限とすることが決まり、現在これに向けた準備を行っている。また、水晶岳はジオサイトとし、日本式双晶の希少性、価値についての地域住民の理解を深めるために、研究者による講演会を開催した。



地域住民との協議の様子

●地域住民によるサイト清掃活動

五島自然塾を中心とした地域団体・住民によって、島山島や登屋ノ首、魚津ヶ崎・立小島、八朔鼻の海岸線において、漂着ゴミ回収作業が行われている。その際には、海岸線の露頭紹介や地域の成り立ち・魅力の説明を行い、地域を学びつつ、各サイトを楽しく清掃できるように工夫している。また、八朔鼻の貴重な植物を守るために、市役所でボランティアを募り、繁茂してきた外来植物の駆除作業を行い、さらに、事務局で八朔鼻の植物を守ることを啓発する解説板を設置した。福江島玉之浦町の御岳（魚見台）や奈留島の水晶岳の遊歩道については、保存会やガイド団体によって、清掃作業が行われている。



島山島海岸の漂着ゴミ回収



登屋ノ首の漂着ゴミ回収



御岳の遊歩道整備

●鬼岳降下スコリア堆積物、井坑(いあな)の保全

鬼岳降下スコリア堆積物の露頭や溶岩トンネルの井坑は、福江火山群の活動の記録を良好に残したサイトである。

しかし、鬼岳降下スコリア堆積物の露頭は、風雨により風化し雑草が繁茂しつつあり、学校教育やジオツアーで訪れる際には事前に雑草を刈り、可能な限り良い状態で露頭を観察できるようにしている。地層の剥ぎ取り標本を作製して拠点施設で展示する活用方法も考えられるが、鬼岳の麓で露頭を観察することに意味があると考え、現場での露頭保全方法を模索中である。



鬼岳降下スコリア堆積物

井坑については、もともと観光用として活用されていた区間が、岩盤落下の危険性のために中に入ることができない状況となっている（県指定天然記念物の区間は生態系保護のため元々立入禁止である）。井坑は総延長 1,420 m といわれ、また坑内は溶岩が流れた様子を良好に保存しており、日本でも有数の溶岩トンネルである。地域住民と協議を行い、安全性を確保しつつ、保全・活用できる体制を構築していく。



井坑入口（地点①）



野坑内部（地点②）



井坑平面図（松本，1971 に加筆）

①、②は写真の位置

③ 地質・地形遺産の保全の課題と展望

地質・地形遺産は、長い年月をかけて形成されたいわば地球の履歴書で、一度失われると再生不可能な貴重な遺産である。これらは今を生きる私たちだけのものではなく、将来を生きる世代にとっても過去を振り返るための重要な資料である。貴重な遺産を将来にわたり遺していくために、計画的な保全と開発が必要であり、地域住民の遺産価値への理解、保全への参加、土木・建築関係団体との協力が必要である。持続可能な保全計画を確立するために以下の短期目標、中期目標を設定する。

（１）短期目標（2021 年度）：サイトカルテの作成と保全活動の継続

- ・サイトカルテの作成
- ・水晶岳の保全協議（継続）
- ・サイトごとの保全協議（鬼岳降下スコリア露頭、井坑など）
- ・サイトの清掃活動（鑑瀬溶岩海岸、カヅメ海岸、島山島、八朔鼻、魚津ヶ崎・立小島、登屋ノ首など）

（２）中期目標（2024 年度まで）：サイトの保全計画の策定、サイトの見直し

- ・サイトの法的保護措置の協議
- ・全てのサイトについて保全計画を策定、五島列島ジオパーク保全計画としてまとめる
- ・モニタリング調査の継続的な実施
- ・サイトの掘り出しと見直し

E-1-2 境界線

申請地域の陸域はいずれも島であり、周囲の陸地とは海で隔てられるため、境界線はいずれも海上に引かれている。申請地域の北の境界線は、奈留島と新上五島町若松島との中間線に境界が設定される。申請地域のおおよそ東、西、南の境界線は、約2万年前に五島列島、九州本土、大陸が接近していたことや、近海で営まれる漁業（定置網漁）の範囲に近いことから、海底地形を考慮して水深100mまでを範囲としている。



申請地域の境界線

E-1-3 可視性（ビジビリティ）

申請組織では、ジオパーク活動について地域内外に周知するため、ホームページやSNSだけでなく、拠点施設である鑑瀬（あぶんぜ）ビジターセンターや福江港などに横断幕、のぼり、ポスター等で「ジオパーク活動に取り組んでいること」を示している。そのうえで、エリア、主要なジオサイト、巡るためのアクセスやコースについて簡単に紹介するリーフレットを2019年3月から作成し、公共施設や複数の個人飲食店等にて配布している。

ジオサイトでは、訪れた人がどのような場所かわかるように2019年より解説板（日英表記）とそこに至る道順案内板を設置している（現在11基）。

このほか、ジオサイトの写真等の入った消しゴム、鉛筆、ルーペ付き定規、缶バッジ、うちわ、名刺、エコバッグ、トートバッグといった日常で使用するようなノベルティグッズを作成してイベントや学校での授業で配布することで、親近感をもってもらおうと同時に、ジオパーク活動の可視性を高めている。



福江港での横断幕



ビジターセンター入口ののぼり

E-1-4 施設・インフラ整備

つたわる! : ジオパーク活動を知り、興味をもってもらうきっかけをつくる

申請地域内での情報発信やサービス提供の施設として、五島列島の自然を学ぶことができる鑑瀬(あぶんぜ)ビジターセンターをはじめ五島観光歴史資料館、各地区公民館などの公共施設、道の駅などの商業施設、港や空港などの交通拠点施設が挙げられる。

(1) ジオパーク拠点施設の整備

鑑瀬ビジターセンターは、西海国立公園の自然情報を発信する施設として1995年に福江島南部に整備され、年間約15,000人が来館する。この施設をジオパーク活動の拠点及び地域コミュニティの活性化のための施設とするため、2019年度から整備を進めている。整備内容の検討にあたっては、地域住民やジオパーク活動に関わる方々や学識顧問と意見交換を重ねており、2022年4月に予定しているリニューアルオープン後は、次のような利活用を計画している。

① ジオパーク活動の拠点

施設内を「ジオミュージアム(常設展示)」、「ジオファクトリー(体験講座、住民活動の発表)」、「コミュニケーションホール(スタッフとの対話)」の3つの空間に分け、学習・興味喚起、体験・交流、誘いを通じて、ジオパークの楽しみ方を知り、五島列島の魅力を五感で体感できる拠点とする。



ジオミュージアムの整備予定図

特にジオミュージアムでは、「五島列島 大陸との懸け橋」をテーマに、島々の成り立ちや特徴、大地の恵みや大陸の影響を受けた生態系・歴史文化・人々の暮らしをストーリーに沿って紹介する展示を計画している。各ジオサイトと展示を連動することで、鑑瀬を玄関口とした島全体をオープンミュージアムと捉えた活用を図る。また、近隣の見どころとも連携した「溶岩海岸での生き物探し」や「椿の実などを使った工作体験」、「火山の噴火実験」などの体験メニューの充実、更新が容易な展示構成により何度訪れても楽しめる整備を進めている。

② 地域住民を巻き込んだ管理運営

地域住民に親しまれ利用しやすい施設とするため、休憩機能がある施設の併設や展示物を住民から募集する仕組みなど地域住民のアイデアを整備内容や体験メニューに反映した整備を進めている。また、市民活動や教育活動の成果を発表できる場所や施設内の機器や資料を使って、新たな発見ができる仕組みを作っている。

日常的に気軽に利用できる施設とするため、来館者がゆっくりしたり、家族で過ごしたり、仕事をしたりできるスペースや機能の充実も取り入れる予定である。

(2) その他の関連施設

① 五島観光歴史資料館

福江市街地にある福江城（石田城）跡内に位置し、年間約 15,000 人が来館する五島観光歴史資料館では、申請組織と連携して、2019 年度には玄関ホールに床地図を設置し、2020 年度にはジオサイトを文化財の視点から紹介する特別展「ジオパーク写真パネル展」を実施した。

五島観光歴史資料館を訪れた地域住民からは、写真パネルを見ながら、「子どものころドンドン溺滝で飛び込んで遊んでいた」という声や、「広報誌の記事を読んでジオサイトに興味をもったが、具体的なサイトの説明が聞けてうれしい」、「こういう場所もあったのか！」との声があがった。観光客からは、玄関ホールの床地図と写真パネルを見比べて、どこにどれがあるのか確認する人や、「この場所に行ってみたい」との声があがり、訪問地の候補となっていた。



資料館玄関ホールの床地図と
パネルの一部

2021 年 7 月より実施予定の「石碑・碑文」展にも申請組織が関与する。また、2 階にある五島列島の「地質」を紹介するコーナーに関して、鑑瀬ビクターセンターの再整備にあわせて相互に連携できる展示や内容の見直しをおこなう。

② 「サブ拠点」施設

拠点施設以外のジオパーク関連施設・ブースを「サブ拠点」と呼称し、整備している。サブ拠点は 2021 年 4 月現在 4 箇所ある。

福江島の玄関口である福江港ターミナルでは、観光案内所でのリーフレットの設置や、2 階待合所において定期的にパネル展をおこない可視性を高めている。同じく空の玄関口となる福江空港（五島つばき空港）ターミナルでも、1 階



福江空港待合所のパネル展

の案内所でリーフレットを取得できるほか、1 階の待合所で常設パネルを設置している。道の駅「遣唐使ふるさと館」では常設コーナー設置とともに、三井楽地区の見どころを紹介している。

上記に加え、岐宿町魚津ヶ崎の「花笑みきくや」では、岐宿地区の物産販売、観光案内、体験をおこなう民間による運営・管理の施設でありながら、ジオパーク活動に関するパネル設置やリーフレット、近隣のジオサイト等の情報を取得できる拠点施設である。

サブ拠点は、2022 年度以降に五島市役所支所を中心として、常設コーナー設置やコンテンツ整備、情報発信により、ジオパークのサテライト施設としての活用を広げていき、地域住民や観光客の集まる場として整備していく。

E-1-5 情報、教育、研究

(1) 一般向けの情報提供

地域住民及び地域外からの訪問者がアクセスできる情報として、ジオサイト説明のための解説板・誘導板の製作、リーフレットの配布、五島市広報誌での活動紹介、ケーブルテレビでの放送がある。

① 解説板・誘導板の製作

解説板は、2021年4月時点で、ジオサイト周辺に11基設置しており、その周囲に誘導板も設置している。解説板は、2019年度に業務委託した五島列島ジオパーク構想の統一デザインにより作成し、木製の土台と解説板自体の配色も茶色を基調とした。解説板は「小学校6年生でもわかる」、「ジオガイドや説明しやすい」という点に注意して作成した。このほか長崎県が新たに2基設置し、「地域の良いところを知って欲しい!」と個人が私有地内に設置したものが1基ある。これらの内容、デザインに関しては申請組織が関与している。



解説板（玉之浦の赤灯台）

② リーフレットの配布

リーフレットでは、申請地域の概要と、地域の大地を知ろうえでの見どころを示している。また、観光客を念頭に、大地を感じられるモデルコースを3つ示して、移動の参考となるようにしている。加えて、ジオパークとはどのようなものか概要を示している。



リーフレット

③ 五島市広報誌での活動紹介

ジオパーク活動を周知するために、毎月発行されている五島市広報誌（加入約15,000世帯）内にコーナーを設けて掲載している。「GOTO!ジオ通信」では、ジオパークの取り組みやジオサイトの見どころ、「わたしのイチオシ～ジオ編～」では、地域住民によるイチオシの場所や風景を紹介するなど、ともに地域の魅力を見つめ直し、読者と共有する機会となっている。

④ ケーブルテレビでの放送

五島市内のケーブルテレビ2網では、五島市制作番組内でジオパーク活動の様子を放送している。番組内では、YouTube「五島列島ジオチャンネル」のコンテンツや、申請組織主催のジオツアー、学校での授業の様子など、地域住民がジオパークに関わる取り組みについて受動的に活動を目にする機会となっている。番組を見た地域住民からは、「ジオパークとは何かがあった」、「知らない場所を紹介していたので、休日に行ってみた」などの反応があり、事務局として一番情報を得やすい媒体であるとの実感がある。

(2) 教育活動全般

① 学校教育

申請地域における一部の小学校～高等学校では、科目「総合学習」、「理科」で大地に根差した地域学習・理科学習をおこなっている（詳細は E-5 に記載）。加えて、2019 年から長崎県立大学の地域研究の受入れと協力や、2020 年には長崎県立大学と活水女子大学からのインターン生の受入れをおこなった。ある申請地域出身のインターン生は、「一番のお気に入りジオサイトでもある高浜海岸を皆に知って欲しい」とのことで、YouTube の脚本、撮影、編集に取り組み PR をおこなった。

② 社会教育

学習指導要領外の子ども教育として、部活動や育英会（親子レクリエーション）で地域の魅力を知る講座や体験学習をおこなっている。

また、「大人にこそ地域の魅力に気づいてほしい！」そのような考えから、住民自身が大地の視点で地域を知り、語れるようになるような大人向け講座・座談会を 2017 年 10 月よりおこなっている。

公民館講座・市民団体向け講座では、「ジオパークってなんだろう？」というタイトルのもと、「ジオパークとは」、「五島列島の基礎知識」、「五島列島の楽しみ方」について、親しみを持ってもらえるように伝えている。

また、他地域のジオパークの取り組みや、五島列島の地質学的特徴や文化的特徴といった内容の講演会を、大学教員等におこなってもらうことで、「ジオパークってなんだろう？」から一歩先の専門的な話を聞く機会を設けている。



大学教員による講演会

(3) 学術研究の支援

申請組織は、申請地域内における学術研究を推進している。五島列島は離島であるという地理的条件があるために、これまで大地に関わる分野をはじめとした学術研究が非常に少なかった。地域の資産の学術的価値を高めるために、これまで個別的に研究者支援（申請組織による交通費の支給等）を継続的におこなってきた。

2020 年度には「五島列島ジオパーク構想活動支援助成（調査・研究事業）」を開始、募集し、研究者を対象に 1 件 30 万円の研究補助をおこなった。2020 年度は 6 件（うち 1 件は社会情勢によりやむを得ず辞退）採用した（ジオ関連 3 件、文化関連 1 件、ジオパーク活動関連 1 件）。このうちジオパーク活動関連の研究は、投稿論文 2 編として発表されている。2021 年度以降も継続して実施する。

E-2 その他の遺産

E-2-1 自然遺産

申請地域の代表的な樹木や大陸との関わりを示す代表的な自然遺産を掲載

① ヤブツバキ –五島列島の代表的な照葉樹–

申請地域の代表的な樹木として自生するヤブツバキがあげられる。ヤブツバキは、照葉樹林帯を構成する代表的な樹種で、五島列島では、主にツバキ油の搾油のために利用されてきており、東の伊豆大島、西の五島列島と称されるほどのツバキ油の生産地として知られてきた。久賀島では古くから島民の手により大事に保護されてきており、久賀島東部に所在するヤブツバキの純林は長崎県の天然記念物の指定を受け、文化財としても保護されている。



海岸に自生するヤブツバキ

② 溶岩海岸の植生 –八朔鼻–

八朔鼻は、福江島北部の溶岩大地の北端に位置する海岸で、付近一帯の海岸は、流れ出た溶岩がテラス上の平坦な地形となっている。

地域住民の「磯遊び（磯祭り）」の場としても利用されてきたことから、定期的に海岸清掃（漂着物の撤去、外来植物の駆除など）をおこなってきたため、海浜植物にとって良好な自然環境が保たれてきたといえよう。

この狭い範囲に長崎県で見られる海岸植物の約 3 分の 1（40 種余り）が生育しており、県指定の天然記念物として保護されている。



八朔鼻の海岸

③ 大陸への渡り鳥 –中継地としての五島列島–

五島列島は、位置的に大陸に近いという地理的特性から、大陸へと渡る渡り鳥の中継地としてもよく知られている。福江島南西端の大瀬崎は、ハチクマの中継地としてよく知られた場所である。ハチクマはタカ的一种で、夏に日本で繁殖し、9月中旬から10月上旬にかけて西へと移動し、その大部分は福江島の大瀬崎周辺に立ち寄り、そこから西海上に飛び出し、2～3日かけて東シナ海を越え、大陸へと渡る。

古代の遣唐使を地で行くように、渡り鳥もまた大陸へと渡る前に五島に立ち寄るのである。



五島に飛来するハチクマ

E-2-2 文化遺産

申請地域の生活文化や大陸との関わりを示す代表的な文化遺産を掲載

① 城壁・石垣・石積み・石蔵 ー溶岩石を用いた生活文化ー

五島列島最大の島である福江島においては、火山活動によって形成されたなだらかな溶岩台地が各所に広がる。人々は、溶岩大地を開墾する際に露出した溶岩石等を、様々な生業・生活の場面で用いてきた。

日本最後の城である福江城(石田城)の城壁には、近隣の海岸で採取されたと思われる溶岩石が積み上げられており、かつての城下町の名残をとどめる武家屋敷通りや郊外の農村集落には、溶岩石を用いた石垣が随所に良好に残されている。

福江島南部の富江地区では、露出した溶岩礫を農作業の倉庫、あるいは石積みのかんころ棚(薄切りにしたサツマイモを干す棚)として、現在に至るまで利用している。



武家屋敷通りの石垣

② 遣唐使関連史跡 ー大陸との交流を示す文化財ー

五島列島は、日本の最西端にあり大陸に一番近い地理的環境であることと、リアス海岸を呈している場所が多く、深い入江が湾の奥深くまで入り込んでいるため天然の良港が各島に所在していたことなどから、8世紀以降の遣唐使船の最終寄港地として利用されてきた。

五島列島の各地には、遣唐使船の寄港地をはじめ、中世末～近世初頭に至るまで、大陸との交易で利用されてきた港(湾や入り江)があり、現在でも重要な港湾として利用され続けている。



三井楽の溶岩海岸
遣唐使一行が最後に見た風景

③ 貝塚・海中遺跡 ー縄文海進と地殻均衡などを示す遺跡ー

五島における遺跡の立地的特性は、海岸部に集中することである。特に縄文、弥生時代の遺跡はほとんどが海岸付近に所在し、出土遺物は漁労生活に関わる遺物が大半を占める。稲作農耕社会となった弥生時代においても漁労の伝統が強く残り、新しい稲作社会への転換はあまり見られなかったと思われる。

地質学的には、五島列島地域は縄文時代以降に沈降していることが知られており、このことから五島列島の遺跡の多くが海岸部に残されている理由となっている。五島列島の縄文遺跡群は、第四紀地殻変動を考えるうえでも貴重な遺跡である。



縄文前期の江湖貝塚

E-2-3 無形遺産

申請地域の代表的な民俗芸能や食文化を示す無形遺産を掲載

① 念仏踊り ー豊かな自然環境と結びついた民俗行事ー

8月15日のお盆の時期には、五島列島各地で念仏踊りが行われる。花笠を被り、腰蓑を巻き付け、肩から提げた腰太鼓を打ちながら円形で踊るのは共通するが、奏楽、歌唱、衣装などは地域ごとに異なり、念仏踊りの呼称も、「チャンココ」「オネオンデ」「カケ踊り」「オーモンデー」など各地で様々である。

衣装の一つである腰蓑の原料は、湿地に育つサンカクイと呼ばれる湿地性植物の一種で、イグサに似る多年生の草本植物である。

福江島では、河川の下流域などに広がるサンカクイの生息に適した湿地生息に適した場所が多く所在する。五島の豊かな自然環境と密接に結びついている無形遺産といえる。



お盆の風物詩 ーチャンココー

② 五島神楽 ー五島における生活・生業を表現した特徴的な舞ー

五島列島では、漁業と農業が同時に成り立つことから豊漁や五穀豊穡を祈願する祭礼や民俗行事が多く伝承されている。

代表的な祭礼としては、全国的に神楽が知られているが、五島列島各地でも「五島神楽（国指定重要無形民俗文化財）」が伝承され、上五島地域に二つ、下五島地域（申請地域）に四つの神楽が伝承されている。

五島神楽は、伝承地ごとに舞の仕方が違っており、漁業、農業に関係の深い舞が継承されているのが五島神楽の特徴となっている。



五島神楽 ー入鹿高松（いるかたかまつ）ー

③ かんころ餅 ー大地の恵みー

福江島を除けば、まとまった平地が少なく痩せた急傾斜地の多い五島列島において、痩せた土地でも育つサツマイモは、五島列島の風土に適合した農作物であった。

サツマイモは、食べ方や使われ方が多種多様な作物であるが、五島列島における代表的な食べ方の1つが「かんころ餅」である。

かんころ餅は、サツマイモを薄く切って乾燥したものを蒸して餅と一緒につき固めたもので、もともとは冬場の非常食、保存食であったが、今では、五島列島を代表する特産物及び長崎県特産品として島内や県内各地で製造・販売されている。



五島の大地の恵みーかんころ餅ー

E-2-4 気候変動と自然災害への関わり

(1) 気候変動と自然災害に関する方針

かんがえる！

：自分たちの暮らす地域の成り立ちを知ること、
自然災害や地球全体を考えられるようになる

①気候変動への取り組み

気候変動に関する方針は、地域住民が地球全体の変化も自分たちと大きく関わる問題と捉えられるようになることである。地球全体で起こる気候変動の影響は、申請地域の暮らしにも大きく関わる。島々からなる申請地域では、台風の増加、巨大化によって引き起こされる土砂災害や水害の増加が直接的な被害となる。また、水温上昇による魚の分布域の変化は、漁業が主産業の一つである申請地域にとって、生活に直接的に関わる現在進行形の問題である。

申請地域である五島市は、2014年に再生可能エネルギー基本構想を策定して以来、再生可能エネルギーの普及・推進に野心的に取り組んでおり、風力発電・潮流発電・太陽光発電等により、2030年には申請地域内の再生可能エネルギー自給率132%（長崎県全体の目標25%）を計画し、2013年比で二酸化炭素排出量の33%以上（日本全体の目標26%）を削減予定である。地域住民の意識を高めるため、ジオパーク認定を機に、気候変動が与える地球環境への影響に関する普及・啓発を推し進める。

短期計画としては、2021年度に五島市再生可能エネルギー推進室と共同で気候変動に関する地域住民向けの講演をおこなう。中期目標としては、2024年度に気候変動に関するシンポジウムを開き、住民の地球環境に対する関心を高めていく。

② 自然災害への取り組み

自然災害に関する方針は、自分たちが暮らす地域の成り立ちを知ること、どのような災害が起こり得るのかを自ら考えられるようになることを継続的に進めていくことにある。そのうえで、個人が災害発生への備えをできるようになるようにする。

このことを踏まえ、短期計画として2021年度は、2020年度と同様に申請地域である五島市の各部署や地域内の高校と協力して講演や授業をおこない、目標に向けた裾野を広げていく。中期目標として、2024年度までは継続的にこれらの取り組みをおこなうことで、申請地域住民への浸透を図る。

(2) 自然災害に関する地域コミュニティでの事例：「奈留の災害と取るべき対応」

2020年7月に実施した「奈留地区地域防災訓練」では、奈留島は「山」、「斜面」、「平地」からなるとし、例えば土石流によってできた土地には、再度土石流が下ることが考えられるとして、状況に応じた避難の仕方を提案した。参加者からは、「自分の住む斜面地区ではどこに逃げたらいいのか」などの反応があり、自然災害に対する関心が高まっていた。



奈留地区防災訓練の様子

E-3 管理運営

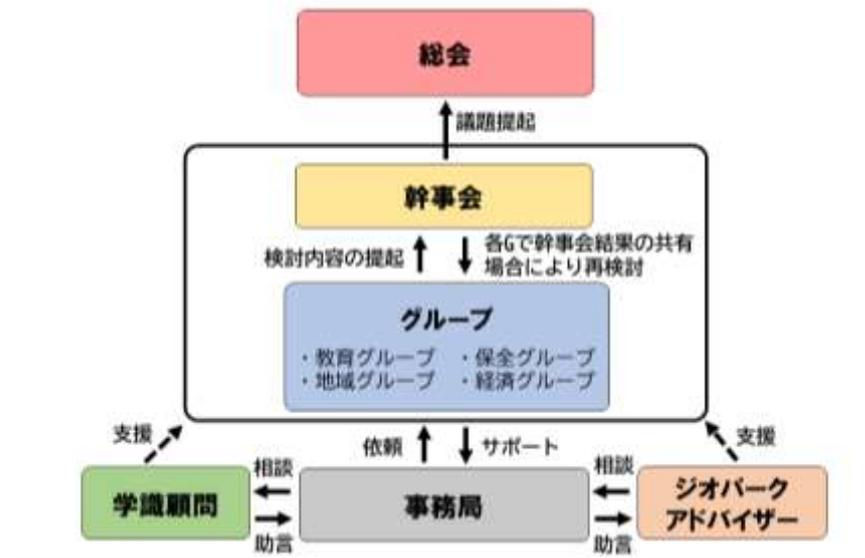
E-3-1 運営体制

(1) 運営組織：五島列島ジオパーク推進協議会

運営組織である五島列島ジオパーク推進協議会は、2017年6月の発足以降、基本計画の策定から取り組み内容に至るまで五島列島ジオパーク構想の方針を決めてきた組織である。

2021年4月20日現在、協議会は「総会」「幹事会」「グループ」「学識顧問」「ジオパークアドバイザー」「事務局」からなり、地域団体や民間企業、大学教員、行政（国・県・市）で構成している。

このうち「グループ」は、基本計画・行動計画に沿い、個別課題や具体的な活動内容の企画・検討をしながら活動を推し進める場となっている。



五島列島ジオパーク推進協議会の組織図

① 総会

総会では、規約の制定及び改廃、事業計画及び事業報告に関する事、予算及び決算に関する事を審議・決定する。その他必要な事項を決定する。総会には、以下21の団体・部署の代表が所属している。また、総会には、会長が必要に応じて学識顧問に出席を求めることができる。

商工・観光：福江商工会議所会頭、五島市商工会会長、

（一社）五島市観光協会会長

交通：五島自動車（株）代表取締役、九州商船（株）取締役、

福江空港ターミナルビル（株）代表取締役社長

教育・文化：五島市文化財保護審議会会長、五島文化協会会長

地域代表：おくうら夢のまちづくり協議会会長、三井楽まちづくり協議会会長

農協・漁協：ごとう農業協同組合代表理事組合長、五島ふくえ漁業協同組代表理事組合長

民間活動団体：五島市おもてなしガイド連絡協議会会長、五島自然塾代表

行政：環境省五島自然保護官事務所保護官、長崎県県民生活環境部部長、

長崎県五島振興局長、五島市長、五島市議会議長、五島市教育長、

五島市総務企画部長

② 幹事会

幹事会では、各グループで決定した事項の確認や総会に付議すべき事項を協議する。幹事会は、数人の幹事と各グループの代表者によって構成される。

③ グループ

グループは、関連団体、部署の実務者で構成され、特に協議が必要なテーマについて議論し、取り組み方針を決める。このグループでは、必要に応じてグループ数及びメンバーの増減をおこなうことで、機動性をもたせている。2021年4月現在、以下のグループからなる。

- ・教育グループ：五島市教育委員会学校教育課、五島市教育委員会生涯学習課
- ・保全グループ：環境省五島自然保護官事務所、五島市教育委員会生涯学習課
必要に応じたサイトごとの関係者協議
- ・地域グループ：五島自然塾、五島市地域協働課
- ・経済グループ：五島市観光協会、五島市観光物産課

④ ジオパークアドバイザー

構想段階を過ぎつつあり、これから活動を大きく進展させようとする申請組織に対し、助言をおこなう人物として、2020年度はジオパーク活動経験者である島原半島ジオパーク協議会の杉本伸一氏を招聘した。

(2) エリアにおける学術研究の推進

① 学識顧問

専門的知識により申請組織の活動を支援する学識顧問は、以下の5人からなる。

- 中西弘樹：長崎大学名誉教授（植物生態学、環境学）
- 清川昌一：九州大学大学院理学研究院准教授（地質学：地球史・フィールド地質学）
- 清野聡子：九州大学大学院工学研究院准教授（海洋生態学）
- 深見 聡：長崎大学総合生産科学域（環境科学系）准教授（観光学、人文地理学）
- 寺井邦久：長崎県立島原高等学校教諭（地質学）

② 専門員の雇用

2020年4月から新たに2人の専門員が常勤で勤務している。専門員は、学術的価値を理解しつつ、大学や研究者と地域住民との橋渡し役として活動する。学問的背景や専門用語に不慣れな地域住民には、生活の中で馴染みのある言い回しに変えて周知する、「翻訳者」としての技能が求められる。専門員の主な業務は、申請地域における大地の視点に立った学校教育や社会教育、研究者等の対応と調査補助、学識顧問などとのジオサイトの検討およびとりまとめである。

(3) 申請組織のスタッフ

申請組織のために実働している事務局スタッフは、事務局長（五島市政策企画課長）、事務局員（五島市政策企画課）3人、専門員（五島市政策企画課ジオパーク推進班）2人である。

これに加え、鑑瀬（あぶんぜ）ビジターセンター職員3人も、講座、イベント、YouTube動画製作等で事務局と連携して取り組みを進めている。

No.	名前	雇用	任務	専門	% 時間	性別
1	小田 昌広	常勤	事務局長		30%	男
2	松崎 義治	常勤	事務局員	考古学（世界遺産）	50%	男
3	唐津 博孝	常勤	事務局員		100%	男
4	岩田 晃一	常勤	事務局員		100%	男
5	安永 雅	常勤	専門員	地質学	100%	男
6	高場 智博	常勤	専門員	地理学	100%	男
7	出口 敏也	非常勤	ビジターセンター職員	（野鳥）	40%	男
8	磯野 義信	非常勤	ビジターセンター職員	（ものづくり）	40%	男
9	神宮司真人	非常勤	ビジターセンター職員	（動画編集）	40%	男

(4) 常勤の地球科学者と申請組織の女性

常勤の地球科学者は、専門員として安永 雅（地質学：構造地質学・堆積学）、高場智博（地理学：地形学）の2人が在籍している。

申請組織に所属する女性は、総会（2/26人）、幹事会（1/8人）、事務局（0/6人）の40人中3人であり、学識顧問1人、五島市おもてなしガイド連絡協議会会長1人、五島市観光協会事務局長1人である。

(5) 予算と財政状況の概要

申請組織の予算は、五島市からの負担金により、2017年度（1年目）が300万円、2018度（2年目）から2021年度（5年目・本年）がいずれも830万円である。これらの予算には、協議会事務局所属の五島市一般職員及び五島市雇用である専門員の人件費、事務局メンバー等の全国大会参加の旅費や申請地域における看板製作費等は含まれていない。

申請組織の予算は五島市一般会計の単年度予算に依存している。五島市の財政状況の急激な悪化等により、ジオパーク活動に支障が出ることを避けるため、中・長期目標として認定商品の造成・販売、ジオツアーの実施による利益等により、少しでも利益を上げて自主財源が得られるよう取り組んでいく。

E-3-2 基本理念

申請組織は、ジオパーク活動を進めるための根幹を担う基本理念を制定している。基本理念をもとに、教育・保全・持続可能な開発に関わる7つのテーマを設定した。基本理念の達成のため、長期目標、中期目標、短期計画を立てて取り組んでいる。

基本理念（何のためにやるのか）

大地に刻まれた魅力ある五島列島の記憶を未来につなぐ

私たちの今の暮らしは、これまで大地に向き合い、努力を重ねながらつないできた先人の苦労の上に成り立っています。しかし、便利な世の中は、私たちの暮らしを豊かにする一方で、先人が作り上げてきた歴史を忘れさせようともしています。

五島列島の豊かな自然や歴史、文化には理由があります。それらを支えた大地（ジオ）の成り立ちや仕組みを探り、将来に残していくためにはどうしたらよいかを、五島列島に暮らす人々、関わる人々が考え続けます。そして、故郷に誇りをもち、自分たちの手で魅力ある社会を未来につないでいくことが、今を生きる私たちに課せられた使命です。

そのために取り組む7つのテーマ（長期目標）

1 「かたる！」（学校教育、社会教育）

すべての人々が自分たちの住む土地のことを知り、理解し、他の人に語れるようになる

2 「つたわる！」（広報周知、施設整備）

ジオパーク活動を多くの人々が知り、興味をもってもらう機会をつくる

3 「かんがえる！」（自然災害、気候変動）

自分たちの暮らす地域の成り立ちを知ることで自然災害や地球全体を考えられるようになる

4 「まもる！」（地域資源の保全・継承）

大地を語るうえで欠かせない重要な地域資源を守り、将来にわたり活用する。また、地域のアイデンティティである歴史・文化を次世代に継承していく。

5 「わかる！」（学術研究）

地域の学術調査の進展により、大地をはじめとした郷土の価値を知る

6 「かかわる！」（女性や若者の参画、地域活動の促進）

地域の未来を考え続けるために、どのような立場の人でも意見を言える環境を整える

7 「つなげる！」（ジオツーリズム、地域ブランド向上）

次の世代も住みよい郷土とするため、大地に配慮した新たな仕事を増やす

そうすることで、

- ・郷土の価値を知ること、**郷土を語れる人**が増える！
- ・大地に関わる貴重なものが**保護・保全**され、これまで育まれてきた人々の**文化が継承**される！
- ・郷土に関わるみんなで考え続けることで、将来にわたり**住みよい郷土**ができていく！

E-3-3 運営計画

ユネスコ世界ジオパークの10題目と申請地域を構成する自治体の12の取り組むべき課題(戦略プロジェクト)を念頭において、申請組織の活動方針を定めた。

「基本理念と取り組む7つの項目」を基にして、「大地に刻まれた魅力ある五島列島の記憶を未来につなぐ」ため、長期目標(最終目標)、中期目標(5年間で達成する目標およびその1年ごとの計画)、短期計画(直近1年間の計画)を定めた。このように定めることで、目の前の1年と先の5年、最終目標を明確に認識しながら取り組みを続けている。中期目標における各年の計画及び短期計画は、活動を考え続ける中で必要に迫られた場合、適宜見直しをおこなう。



E-3-4 これまでの取り組み

2008年や2013年におこなわれた大学教員による活動がきっかけとなり、五島の良い所を語り合う地域団体が設立された。地域団体の活動により、五島列島の大地・生態系・歴史文化を楽しむ学習会やイベント、大学教員や国内のジオパーク関係者を招いた講演会が開催された。このような活動が市民の目に触れるようになるにつれ、ジオパーク活動本格化の機運が高まり、2017年には行政主体となる「五島列島ジオパーク推進協議会」が設立された。

協議会設立後は、ジオパークとしての見どころの発掘・整理、地学的内容の学習を推進するなど活動してきた。2019年度には、協議会設立から約2年の準備期間を経て申請をする機運が高まったとして、新規申請をおこなった。しかし、ジオパーク活動を推進していきだけの十分な取り組みと組織体制ができていなかったことから、認定見送りとなった。

認定見送りを受け、基本理念・アクションプランを再整理し、事業計画を立てたうえで、不足していたジオサイトの保全や自然災害・気候変動、ジオガイド養成などの取り組みを新たに始めた。さらに組織体制を見直し、様々な活動が本格化したことから、ジオパークとしての準備が整ったと判断し、改めて新規申請をおこなうに至った。

(1) 「五島列島ジオパーク推進協議会」発足に至る個人・地域団体の主な活動

年月	できごと
2008年 3月	研究会「Project A 2008 in 五島列島」開催（九州大学・清川昌一氏）
2013年 5月	「五島の海岸と歴史散策」開催（九州大学・清野聡子氏） この活動から地域団体「五島自然塾」が設立される
2014年 9月	五島自然塾が市民向け講座やシンポジウムを開催（計3回）
9月	五島文化協会が「石田城シンポジウム」を開催（2019年に第2回開催）
10月	五島自然塾が「ジオサイト候補地（案）マップ」作成・公開
10月	五島自然塾が西海国立公園60周年記念講座を開催（計7回）
2015年 1月	五島自然塾が講座などを開催（計3回、九州大学・清野聡子氏）
2月	五島自然塾が講演会「五島列島をジオパークに！」開催 （講演：島原半島ジオパーク協議会・大野希一氏ほか）
2016年 5月	五島自然塾が冊子「知らなかった！五島の自然」を発行



「Project A 2008 in 五島列島」の様子



「ジオサイト候補地（案）マップ」の検討過程



「五島列島をジオパークに！」の様子

(2) 協議会設立後の申請組織の主な活動

年月	できごと
2017年 4月 6月 6月 9月 10月 10月 11月	五島市役所政策企画課まちづくり推進班にジオパーク構想担当を2人配置 五島列島ジオパーク推進協議会の設立総会を開催 協議会の事務局員4人（専任2人、兼任2人）で発足 日本ジオパークネットワークに準会員として加盟 ホームページにジオパーク構想特設サイトを開設 第8回日本ジオパークネットワーク全国大会男鹿半島・大湊にてポスター発表 初のジオパーク講演会「ジオパークを知ろう！」（現在まで計10回） 「地域自慢放談会」開催（現在まで計14回）
2018年 3月 4月 4月 6月 9月 10月 10月	初のジオツアー「海と陸から見る富江のまち」開催（協議会主催） 「GOTO! ジオ通信」第1号発行 ジオパーク構想テーマ「 五島列島 大陸との懸け橋 」を決定 ジオパーク専門員1人着任（任期付職員：古生物学） 協議会の事務局員を5人（専任3人、兼任2人）に増員 初の学校教育・五島海陽高校での出前講座（現在までに計27回） 第9回日本ジオパークネットワーク全国大会（アポイ岳）にてポスター発表 ジオパーク構想のロゴマーク決定
2019年 4月 4月 4月 5月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 12月	五島市役所政策企画課にジオパーク推進班新設 銚子ビジターセンター職員3人がジオパーク推進班所属となる 協議会の事務局員を6人（専任4人、兼任2人）に増員 総会において申請書提出を決定 日本ジオパーク認定申請書を提出 千葉・幕張メッセにおいてプレゼンテーション審査を受ける 日本ジオパーク全国大会プレイベント（おおいた）に参加 日本ジオパーク委員会による現地審査を受ける 申請地域の観光ガイド団体が隠岐世界ジオパークを視察 第37回日本ジオパーク委員会において、認定見送りが決定 第10回日本ジオパークネットワーク全国大会（おおいた）でポスター発表 臨時総会においてジオパーク活動の推進を再確認 奈留島において第1回日本式双晶保全協議を開催（現在まで4回開催）
2020年 4月 6月 6月 7月 7月 7月 8月 12月	新たにジオパーク専門員2人着任（任期付職員：地質学・地理学） 協議会の事務局員は6人（専任4人、兼任2人） ジオガイド養成講座を実施（全12回）※認定試験12月実施 YouTube「五島列島ジオチャンネル」開設（現在までに8本製作） 第1回「調査・研究及び普及・啓発助成事業」募集・決定 ジオパーク構想ポロシャツデザインを選定 初の防災事業「奈留地区地域防災訓練」実施（現在までに計2回） 島原半島ジオパーク協議会・杉本伸一氏と協議（計3回、上五島講演会実施） 初のジオガイド認定（27人）
2021年 2月 3月 4月	「令和2年度ジオパーク学習実践事例集」作成 臨時総会において申請書提出を決定 総会において協議会組織の一部を改編

E-4 重複（オーバーラッピング）

申請地域内には、2018年7月にユネスコ世界文化遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産である「久賀島の集落」と「奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）」が所在する。

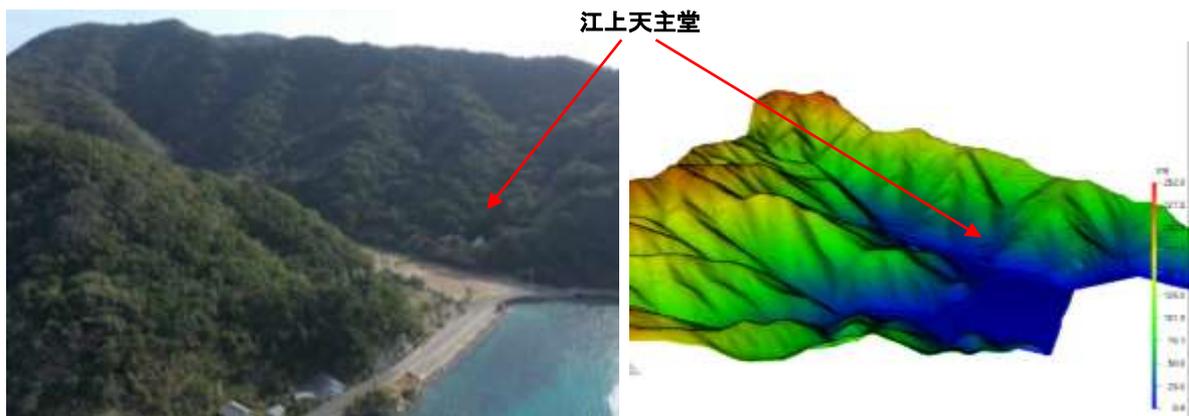
「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、17世紀から19世紀までの2世紀以上にわたるキリスト教禁教政策の下で、潜伏キリシタンが密かに信仰を続ける中で育んだ、宗教に関する独特の文化的伝統を物語る遺産である。

18世紀末、大村藩領^{そとめ}外海地方にいた潜伏キリシタンは、自らの信仰を続けるため五島列島などの離島地域への移住を選択し、移住先の社会や宗教との折り合いの付け方を考慮しつつ移住先を選んでいった。

潜伏キリシタンは、移住先の島々で、島の未開拓地や既存集落の縁辺部に移住して、既存集落との間で互助関係を築きながら、あるいは、既存の集落から離れた海に近い谷間に集落を築き、密かに自らの信仰を続けた。彼らは、解禁後にカトリックに復帰し、各地に教会堂を立てていった。

潜伏キリシタンの移住によって形成された集落が、元々どのようにしてできた地質・地形だったのか、なぜそのような場所に移住せざるを得なかったのか、移住後どのように発展していったのかなど、世界文化遺産を目的に訪れた観光客にその集落景観の基となる地質・地形の説明を加えることにより伝えることは、より広く五島列島に関心をもってもらうことにつながる。

すなわち、ジオパークの観点から語られる世界遺産の価値に深みが増すとともに、『世界遺産とジオパーク』という新たな観点からの相乗効果が図られると期待できる。



【奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）】世界文化遺産構成資産

左が航空写真、右が標高段彩図。狭隘な谷地形であることがわかる。

奈留島では断層活動の影響でこうした狭隘な谷地形が各所に所在し、18世紀末ごろまでは未開拓地であった。潜伏キリシタンたちは、そうした未開拓地に移住し、共同体を維持してきた。

E-5 教育活動

E-5-1 教育活動に関する基本方針

かたる！：すべての人々が自分たちの住む土地のことを知り、
理解し、他の人に語れるようになる

ジオパーク学習の方針は、地域住民が自分たちの住む地域の大地の成り立ちを知り、その地域「だからこそ」の文化や地域「だからこそ」の動植物をも含めた「大地の視点にたった地域教育」の進展である。ジオパーク学習の進展によって、五島列島に住む子供たちが、自分たちの住む地域（五島列島・各地区）のことから日本列島や地球を知り、考え、語れるようになるようにすることを通じて、持続可能な地域社会を構築する担い手を育成することが目標である。

E-5-2 教育活動の進展および成果

(1) ジオパーク学習の実施

「大地の視点にたった地域学習」として、2020年度には申請地域内の小学校～高等学校において14回（授業時間外3回を含む）授業を実施した（申請地域設立後通算27回）。学校における取り組みは、科目「総合的な学習の時間」、科目「理科」、授業時間外として「育英会（親子レクリエーション）」、「部活動」と多岐にわたる。

(2) 教育プログラム

2018年に初めての「ジオサイト学習」を実施して以来、教育プログラムの策定に向けて、教育委員会や学校の先生方と綿密に協議をおこない、ジオパーク学習のあり方や現場で必要な教材の開発を進めた。昨年度実績は「令和2年度ジオパーク学習実践事例集」として冊子としてまとめ、学校の先生方への資料とした。申請地域である五島市では、「総合的な学習の時間」における地域学習の单元「ふるさと五島学」の中の一つの取り組みとして、2018年度より一部の学校で「ジオパーク学習」を実施している。

(3) ジオパーク学習における実践事例

① 富江中学校における授業・実験・野外学習

2020年度に富江中学校1年生を対象におこなった「火山と富江の暮らし」では、自分たちが通う中学校や富江の街はどのような場所なのか体感するために、火山のでき方、地域の石の色、グラウンドのヒミツに迫った。地域のことを知るとともに、「理科」の内容ともリンクさせることで、生徒の学習が進んだ（事例集に詳細を記載）。



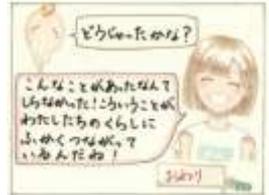
溶岩海岸の地形を観察

② 県立五島高等学校による小学生向け「ジオパーク教材」の開発・実施

2020年度に五島高校「バラモンプラン」2年生のグループ「nature 班」は、申請地域である五島市の課題として「ジオパーク活動が浸透していない」ことを挙げた。浸透していないのは、子供でも楽しめる教材がないためとして、2020年度に「ジオパーク活動がどのようなものか」知ってもらうため、小学生向けのマンガとポスターを作成し公開した。

その結果、「郷土の魅力について考えるきっかけ」や、「ジオパークへの興味、関心」が高まったことがわかった。今後の課題として、同じ取り組みを他地域にも広げて、普及・啓発を進める必要性を挙げている。

この取り組みは、メンバーの一人が以前父に連れられて行ったジオパーク講演会で、自分の住む地域のことに関心をもったことを契機に始まっている。



「山内のお米が美味しい理由」の一部

E-5-3 教育活動の課題と今後の展望

学校教育におけるジオパーク学習は、大地の視点に立った地域学習であり、地域学習の推進を図る学校現場にとっても親和性が高い取り組みである。学校現場におけるジオパーク学習の推進のため、以下の短期計画、中期目標を設定する。

(1) 短期計画 (2021年度)：ジオパーク学習の継続的実践と教育現場での浸透

- ・小学校～高等学校で継続したジオパーク学習の実施
- ・授業カリキュラムの作成と実験教材の開発
- ・地域学習発表会「子どもサミット」開催に向けた継続協議
- ・授業（野外学習）におけるジオガイドの同行

(2) 中期目標 (2024年度まで)：ジオガイドを中心としたジオパーク学習

- ・申請地域におけるジオパーク学習実施校 80%を目標とする
- ・学年別・地域別に設定するプログラムの採用率 20%を目標とする
- ・「子どもサミット」を実施する
- ・授業（野外学習）においてジオガイドが活躍する

E-6 ジオツーリズム

E-6-1 ジオツーリズムの基本方針

つなげる！：次の世代も住みよい郷土とするため、大地に配慮した新たな仕事を増やす

申請地域の観光ツアーは、観光地として大自然の見どころである大瀬崎の断崖、鬼岳、高浜海水浴場などを巡るのが主である。最近では、一般家庭に宿泊する民泊体験や農業・漁業体験などといった「田舎暮らしを体験する」体験型観光も増加している。また、多種の新鮮な魚や五島牛、焼酎、ワイン、かんころ餅、五島うどんなどの特産品を活かした食のツアーも人気となっている。2018年には、申請地域内の2つの資産が世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」に登録されたことに関連し、観光入込客数は過去最高となった。

そのような中、2018年3月より申請組織が中心となって、これまでになかった大地を感じ、楽しみ、学ぶツアーを実施している。新たな視点での観光商品の造成、大地に配慮したマイクロツーリズムの推進にはジオガイドの活躍が欠かせないため、2020年より養成をおこなっている。

E-6-2 ジオツアーの実施

申請組織が設立された2017年度より、申請地域の旅行会、地域団体、申請組織による主催によって催行されたジオツアーの回数と人数は、以下のとおりである。

- ・2017年度：地域団体4回（122人）、申請組織1回（40人）
- ・2018年度：旅行会社1回（9人）、申請組織11回（216人）
- ・2019年度：旅行会社3回（49人）、地域団体2回（41人）、申請組織6回（184人）
- ・2020年度：旅行会社10回（76人）

2020年度には申請地域の旅行会社が造成するジオツアー商品に対して、商品作成の補助やガイド支援、ツアー代の補助などの旅行商品造成支援事業をおこなった。

社会情勢の影響により実施回数には限りがあったものの、五島三国観光主催「奈留島の世界遺産とジオパークを巡るツアー（定員20人、4,980円）」では、実施された2回とも満員となり、今後も需要が見込める結果であった。また、地域において新たな試みである、少人数で大地を感じるツアーのJSH主催「嵯峨島ジオクルーズ（定員12人、6,000円）」が4回（計17人）、五島市観光協会主催「大人の遠足 黄島探訪（定員10人、9,000円）」が4回（計18人）実施され、二次離島を楽しむツアーとしても参加者から非常に好評であった。



黄島探訪での一場面

「今どこにいるのでしょうか？」

E-6-3 ジオガイドの養成

2017年度から2019年度にかけては、ジオガイド講習会を受けた既存の観光ガイドを主としてジオツアーのガイドを委託していた。しかし、それだけでは地域の魅力を伝える人材の育成が困難であることから、2020年度にジオガイド養成講座（全12回、試験）を実施した。

ジオガイド養成講座は、専門員や学識顧問だけでなく、萩ジオパーク専門員やガイド講師等の協力を得て、五島列島の大地・生態系・歴史文化だけでなく、「ジオパークとは」、「ジオガイドのスキル」など、ジオガイドとして活躍するうえで基礎的な学習をおこなった。30人の受講生のうち約半数はガイド未経験者であったが、試験実施の結果、27人がジオガイドとして認定された。



ジオガイド養成講座の様子

2021年度には認定されたジオガイド向けにインタープリテーション研修を予定するなど、スキルアップの機会を設けている。ジオガイドには、ジオツアーでのガイドだけでなく、ジオパーク学習や社会教育の講座、イベント等での活躍が期待される。申請組織としては、ジオガイドのガイドスキルの研鑽のため、他のジオパークのジオガイドとの交流を図りたいと考えている。

E-6-4 ジオツーリズムの今後の展望

これまでの観光資源に、ジオサイトの重要性や地域の「食」のおいしいヒミツ、クルーズツアーといった大地を感じられる内容を融合させた観光ツアーは、観光商品としてこれまで以上に価値のあるものになっている。「大人の遠足 黄島探訪」をはじめとしたマイクロツーリズムとしての少人数ツアーは、地域の魅力を楽しむための新たな取り組みとなっている。さらに、五島列島を深く知りたい人のための大地を学ぶツアーも継続的に推進していく。このようなジオツアーを展開していくために、下記のとおり短期計画と中期目標を掲げ、取り組んでいく。

(1) 短期計画（2021年度）：ジオツアー造成のための支援の継続

- ・認定ジオガイド向けインタープリテーション研修などスキルアップのための施策を実施
- ・ガイドブックの作成
- ・地域内の旅行会社への「大地を感じる大人数ツアー」の提案、造成
- ・地域内の旅行会社への「大地を楽しむ少人数ツアー」の提案、造成
- ・申請組織主催の「大地を学ぶツアー」の造成

(2) 中期目標（2024年度まで）：新たなツアー形態として定着、ジオガイドの活躍

- ・ジオツアー等におけるジオガイドの活躍
- ・全国展開の旅行会社との提携への働きかけ、ツアー充実
- ・「地域を楽しむ少人数ツアー」の一般化
- ・大地を学ぶ機会の確保

E-7 持続可能な開発とパートナーシップ

E-7-1 持続可能な開発

(1) 持続可能な開発に関する方針

つなげる！ : 次の世代も住みよい郷土とするため、大地に配慮した新たな仕事を増やす

持続可能な開発に関する方針は、地域社会及び地球環境を考える中で、大地に根差した経済活動の拡大していくことである。申請地域では、持続可能な地域社会及び地球環境の実現のために、五島市再生可能エネルギー推進室が中心となって再生可能エネルギーの普及を図っている。

そうした中、大地に根差した経済活動に関する新たな取り組みとして、「ジオパーク構想認定商品」と「地域ブランドの向上」を進めている。申請地域でとれる魚介類や農産物は、申請地域の大地や周辺の海から得られるジオの恵みである。それらの価値を再認識し、将来にわたって継続した経済活動ができる社会を実現させるために、保全管理を実行しながら、商品価値を高めていく必要がある。

そこで、地域の産品を使って、地域らしい造形の新商品を「ジオパーク構想認定商品」として販売する。ジオパーク活動の浸透を図るとともに、地産地消、地域の産品の再発見をねらいとする。また、「どうしてこの魚はうまいのか？」など、既存商品・生産者ともタイアップすることで、地域ブランドの向上をも図る。

短期計画として、2021年度は、2020年度に計画した「認定商品要綱」を公表し、商品の募集を図る。中期目標として、継続的に応募・協力を得て、2024年度までに12商品程度認定する。また、地域ブランド向上に向けて、関連団体・部署と継続的に協議をおこなう。

(2) 申請地域におけるこれまでの持続可能な開発・椿林の活用

五島列島はヤブツバキの自生数が日本一であり、東の伊豆大島、西の五島列島と称される。特に久賀島では、椿油が活用されていたことから、古来より椿の伐採を禁止する取り決めがあり、そのことが基となり現在の条例となつて法的に開発が制限されるなど、保全と活用の対象とされてきた。



昭和中期以降、杉や檜の植樹のために椿林は伐採されて **五島列島でみられるツバキ林** しまったが、椿油の食用油や医薬品、化粧品として、その価値が見直されている。申請地域では、2020年に国際ツバキ会議（社会情勢により中止）が計画されるなど、地域を代表する植物であり、これからも大切にしていきたい。

E-7-2 パートナーシップ

申請組織には、申請地域の商工・観光団体、交通事業者、農協・漁協が参画しており、申請組織の活動は地元企業との相互理解があって成り立つと考えている。そのため、事業の多くは、地元企業への発注を基本としている。

(1) 地域住民・企業と協力したジオパーク応援商品の増加

ジオパーク活動が進むにつれ、地域の企業や個人の関心が高まっており、協議会と協力したジオパークに関する商品の提案も増えている。地域の障がい者福祉施設では、五島南高校生デザインのジオパーク応援ポロシャツ・Tシャツを作成し、一般に販売している。

ツーリズム商品の開発も地元企業と連携して取り組んでいる。五島市観光協会において商品化している「大人の遠足 黄島探訪」は、少人数で高付加価値の地域を楽しむジオツアーである。2020年度は社会情勢の影響によって大人数の観光ツアーが難しくなる中、地域にとって新たな形式のツアーとなった。持続可能な観光には、地域住民の理解と自然環境への配慮が必須な要素であるので、そこを重視した商品開発を心掛けている。

この流れを戦略的に進めていくため、2021年度からジオパーク構想認定商品の認定制度をスタートさせる。加えて、ビジビリティを強化するために地元ケーブルテレビと協力した映像製作やイベント実行委員会とタイアップした事業を実施している。これから、地域住民や企業と正式なパートナーシップによる戦略的かつ持続的な取り組みを拡大していく。

(2) 地域住民・団体向けの普及・啓発事業の開始と取り組み

申請組織が2020年度よりはじめた「五島列島ジオパーク構想支援事業普及・啓発事業」では、ジオパーク活動の普及のために、個人・団体に対して最大5万円の助成をおこなった。

2020年度の助成対象は4点あり、福江中学校生によるジオパーク構想オリジナルTシャツ作成、五島南高校生による学園祭企画展のためのジオフォト撮影およびジオラマ製作、二次離島のNPO法人によるジオガイド講習会出席、飲食店経営者によるジオサイトでのバンド演奏と写真撮影で得られた媒体でのYouTube制作および飲食店内での広報活動がおこなわれた。



福江中学校オリジナルTシャツ

このような活動は、地域住民の目に触れるもので、内容、助成額ともにこれからの地域住民によるジオパーク活動に資するものと期待でき、2021年度以降も継続して実施する。

E-7-3 地元コミュニティや先住民族の全面的かつ効果的な参加

(1) 「女性や若者、地域住民の参加」に関する方針

かかわる! : 地域の未来を考え続けるために、
どのような立場の人も意見を言える環境を整える

申請組織の女性や若者の参画、地域住民の参加促進に関する方針は、これまで責任ある立場で取り組みに参加しにくかった人々の積極参加を促し、皆で未来を考え続ける体制を整える。

短期計画として、2021年度は女性・若者・移住者・二次離島住民などとも広く意見交換を続ける。また、責任ある立場としての女性の参加を促す。中期目標として、2024年度までに協議会組織の女性の割合を15%以上にし、継続して責任ある立場としての女性の参加を促す。また、地域の話のできる場を確保し、地域の魅力発信の事業を継続する。

(2) ジオパーク活動の広まりに関する事例・商品の増加

申請組織の構成団体である五島自然塾は、申請組織設立以前より講演会を開催するなど活動し、「ジオサイト候補地(案)マップ」や冊子「知らなかった!五島の自然」を発行している。申請組織の設立以降も「地域自慢放談会」の申請組織との共催や、五島自然塾主催の漂着ゴミ掃除活動、岐宿地区のジオサイトをめぐる「岐宿フラワーロード」の取り組みなどで関わり続けている。2020年度には、鑑瀬(あぶんぜ)ビジターセンター整備に伴い、地区住民とより良い施設となるよう積極的に意見交換をおこなってきた。

申請地域内の個人から様々な機関までジオパーク活動への関わりが広まっている。地域内の飲食店が地層をモチーフにして作成した「ジオパークシフォン」、ジオパーク学習及び学園祭企画展にもかかわった五島南高校生徒のアイデアでパン屋さんが製造した「鬼岳パン」、商店街で販売した福江中学校の「ジオパークトートバッグ」などがある。ジオパークへの関心の高まりにより、日本地質学会主催のフォトコンテストで地域住民が2年連続入賞している。郷土史家による絵本「ごとうのやまのおよめさん」は、申請地域内の各学校・幼稚園で読まれ、「脇山」の登山客が増加したという。



五島自然塾の制作物



ジオパークシフォン

(3) 地域住民によるジオパーク活動への取り組み

ジオパーク活動の進展には地域住民の参加が不可欠である。2017年より開催している「地域自慢放談会」をきっかけに、2019年から現在にかけて五島自然塾を中心とした漂着ゴミ清掃ボランティアがおこなわれてきた。この中で、岐宿地区の魅力を再認識した地区の女性4人と建物所有者などの手により、岐宿・魚津ヶ崎において古民家改装の店舗が開業し、地域の農産物や土産品の販売や体験、ジオサイトや見どころを巡るためのガイドブックの設置や地域の案内など、地域住民の手によって観光、物産、地域を楽しむための「ジオパークの拠点」となっている。

E-8 ネットワーク活動

(1) 日本ジオパークネットワークとの連携活動

申請組織は、日本ジオパークネットワークの全国大会や研修会、九州ジオパーク連絡会において積極的に参加し、発表してきた。また、ネットワークを利用して、これまで多くの地域のジオパーク活動の視察や事務局、関係者との意見交換をさせていただいた。

2018年度には濟州島を専門員が訪れ、ジオパーク関係者との積極的な交流を行い、2019年度には日本ジオパーク新規認定申請の過程で、調査員はもちろん、他の地域の調査経験者からも多くのアドバイスを受けたところである。また、申請地域内のガイド団体が、ジオパークの仕組みを学ぶため、自主的に隠岐ユネスコ世界ジオパークを訪れている。2020年度には同じ長崎県内の島原半島ユネスコ世界ジオパークの視察と、島原半島ジオパーク協議会の杉本伸一氏に来訪いただき、活動全般のアドバイスをいただいた。

これらの意見交換・アドバイスは、構想段階にあった申請地域のジオパークのあり方に大きな影響を与え、特に地域への取り組みやジオツアー、教育分野で取り入れている。また、ネットワークを通じて交流を深めたジオパーク関係者には、活動の方針や申請地域の課題に対する助言、ジオガイド養成講座の講師など、私たちの活動の大きな力となっている。申請地域と隣接する新上五島町や同町の地域団体とも定期的な交流・意見交換をおこなっている。

申請組織は、構想段階を過ぎ、ジオパークの仕組みを活かした取り組みを拡充しているところである。今後のジオパーク活動の進展のためにも引き続き、他地域のジオパークの皆様との交流を積極的におこない、切磋琢磨できる関係になるよう取り組みを進めていく。

(2) 申請地域が形成したパートナーとの連携やネットワーク

申請地域には大学などの高等教育機関が無いため、県内の長崎市や島原市、福岡県の大学等の先生方に推進協議会の学識顧問となっていただき、専門分野に関する指導・助言はもちろん、活動全般に対してアドバイスをいただいている。近くにいないというハンデはあるものの、定期的な来訪や電話、メール、テレビ会議を活用することで、コミュニケーションをとりながら、連携した活動を進めている。また、全国大会や研修会での交流、専門員の人的ネットワーク、2020年度に構築した調査・研究の助成制度などにより、五島列島に興味をもつ研究者が増えている。



2019 おおいた全国大会パビリオンの様子



島原半島ジオパーク・杉本氏との協議

E-9 地質鉱物資源の販売

申請地域内には、福江島の増田町（株式会社五島鉱山）、椛島の本窯町（株式会社真興産業）において、採石場が稼働中である。どちらも申請組織に所属しておらず、申請組織は鉱物資源の販売をおこなっていない。

E-10 防災・安全対策、防災教育、災害対応

（1）防災への取り組みの方針

申請地域では、「自分たちの暮らす地域の成り立ちを知ることで自然災害や地球全体を考えられるようになる」ために、防災への取り組みや災害への備えを進めている。

単に「自分たちが住むところが危ないかどうか」ではなく、土地の成り立ちを知ることで、「どのような場所（土地）でどのような災害が起こりうるのか」ということを地域住民に周知して、災害発生時に住民自身で考えて行動できるようになることを目標としている。

（2）申請地域における取り組み

申請地域である五島市においては、自然災害発生に関して「風水害」「地震」「津波」の発生を想定し、予防計画、応急対策計画、災害復旧・復興計画を立てている。また、「福江火山群」についても、活火山であることを念頭において、噴火時の対応を定めている。

（3）日本ジオパークネットワーク及び九州ジオパーク連絡会との取り決め

申請組織は、日本ジオパークネットワーク準会員地域として、災害発生時の対応を決めている。日本ジオパークネットワークの一員としての取り組み「JGN 災害対応方針」及び「JGN 災害対応方針の運用」として、災害が発生し困難な状況に陥った他のジオパークに対して、復旧のための義援金を送ることとしている。また、九州ジオパーク連絡会での取り組みとして、災害発生時の相互応援を取り決めている。

F 日本ジオパーク認定を希望する背景と理由

五島列島ジオパーク推進協議会

●背景

五島列島は、大陸由来の砂と泥の堆積が織りなす絶景や、ハワイや濟州島と同じタイプの火山、亜熱帯や大陸由来の動植物など多様な地域資源に恵まれている。また、大地を活かした石文化や大陸との関わりの中で育まれてきた歴史がある。五島列島の食文化には、海底地形と対馬暖流の影響を受けた多種多様な魚、火山による台地と山々に囲まれた肥沃な大地で育まれた野菜や根菜類、島々の生活を支える穀物や畜産など、多くの魅力がある。

しかし、五島列島に住む人々にとって、これらは「日常」であり、日本や世界の中における「五島列島」の自然、歴史、それらに培われた独特の生活文化の素晴らしさに気づく機会がなかった。

●ジオパーク活動の現状・取り組みの成果

ジオパーク活動は市民や地域団体による盛り上がりから始まり、申請組織の設立から今年で5年目を迎え、ジオサイトの保全、地域住民の学習機会の創造、ジオツアー等の経済活動に関わる取り組みを地道に積み上げてきた。前回の認定見送り後、なぜジオパーク活動に取り組むのかについて考え続け、地域住民が大地の成り立ちや大地と生活文化との関わりを知り、「地域のみなが五島列島を語れる」、「大地に関わる貴重なものが保護・保全される」、「将来にわたり住みよい郷土づくりができる」ようになるための取り組みを続けてきた。

こうした活動の進展により、これまでにない動きが申請地域で起こっている。

例えば、奈留島の「日本式双晶」は、貴重な地質遺産であることはわかっているが、これまで保全に向けた取り組みは具体的には行われてこなかった。しかし、地域住民を含めた関係機関との保全に関する協議を重ねて、一定の保全策を講じていくこととなった。

また、学校教育の場面でも効果が表れ始めている。過去に学校での授業や講演会に参加した中高生の中には、より深く地域のことを知りたいと思う生徒や、同じ地域の小学生に知ってもらおう術を考えている生徒もいる。

社会教育でも同様であり、講演会などに参加した地域住民が地域の価値を知り、漂着ゴミの清掃や友人への紹介、周知のための看板設置などを行っている。ジオツアーに参加した方の中には、友人を誘って再度訪れた方もいた。

このように、活動内容は大々的ではなく地道なものであるが、着実に地域に変化をもたらしており、取り組みの効果が出始めている。この成果を一過性のものにならないためにも、これまでの取り組みをさらに広げ、より多くの人を巻き込みながら、強力に活動を推し進め続けなければならない。

●日本ジオパーク認定を希望する理由

申請地域では都市部への人口流出が続き、日本創成会議が2014年に公表した「消滅可能性都市」に指定され、九州の中でも厳しい地域とされ、衝撃とともに将来への不安を強く抱いた。

以来、人口減少対策を最重要の課題として、官民挙げての移住対策や交流人口拡大事業等により2019年より2年連続の社会増を達成したが、このような成果の継続や雇用の拡大、地域の多様性・独自性を守って未来へと継承していくための取り組みを強化していかなければ、地域自体が消滅してしまう。

そのような中、地域の資源を守り、語り、人々が暮らし続ける島を将来に継承していくために、ジオパーク活動は極めて意義のある取り組みである。ジオパーク活動を通して、子どもから大人まで世代を越えて地域に誇りを感じ、自信をもって「ふるさと 五島列島」を語り発信することこそが、申請地域の生き残る道である。

五島列島には、大地・生態系・歴史文化において多様性があるが、これらの魅力を、五島列島に住む人々だけでなく、五島列島と強く関わる人々、深くつながっている人々とともに、大切に守り、楽しみ、感じ、持続可能な経済活動を通じて、子供たちが生きる次の時代へとつなげていきたい。

私たちが日本ジオパーク認定を希望するのは、大地をはじめとした地域資源を活かしつつ、将来にわたって社会を発展させる仕組みこそが、申請地域が生き残るために必要不可欠であると確信しているからである。

●ネットワークへの貢献

申請地域の特徴の一つは、「日本であって日本でない」ことである。日本国内でありながら、大陸から運ばれた砂と泥による大地からなり、地震もほとんどない環境にある。日本の縁辺にあり、東シナ海交易の拠点でもあったため、多様な文化や人々の交流がある。異なる宗教の人々が共存する世界がここにはある。

このような独自性こそ申請地域の特徴であり、五島列島の魅力を積極的にネットワークに発信することで、例えば「島嶼の特徴」、「日本海拡大」や「単成火山群」といったキーワードを語る国内外のジオパークにおけるジオストーリーの発展に貢献していくものと確信している。

また、申請地域の住民が自分たちの言葉で故郷を生き生きと語る姿を積極的に発信することで、日本ジオパークネットワークの活性化につなげていき、ジオパーク活動の取り組みを通じて、持続可能な日本社会の実現のために貢献していきたい。

能動的にジオパーク活動を考え続けることで、同じように活動する世界や日本のジオパークの良さや違いを知り、交流を深めることで、互いのジオパーク活動を高め合っていくことが可能となる。その結果として、自分たちが住む地域、ひいては、日本や地球全体を考えられる人が増えることで、持続可能な日本社会実現への「懸け橋」となることを目指している。